ふたりでもんはん

lufier

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふたりでもんはん

【Ｎコード】
Ｎ３３７５Ｙ

【作者名】
ｌｕｆｉｅｒ

【あらすじ】
ｐｉｘｉｖ小説投稿サイトからの転載です
何の変哲もない高校一年生の剣道部員、今宮直樹。趣味はＷｉｉでモンハンことモンスターハンターをプレイすること。これにはちょっと自信がある。
キャラ名はＣａｎｏｎ。ゲーム内で知り合った男プレイヤー、ＪＪと仲良くなり、つい教えるためにＳｋｙｐｅに繋いでみると、それはなんと学園のアイドル、通称「女神」様で・・・

ふたりでもんはん　上編（前書き）

作品の一部に、控えめな性的表現を含む文章があります。不快に思われる方はご注意下さい。
モンハン、モンスターハンターという名称、及び作品中にある一部の固有名詞は全てカプコン（ＣＡＰＣＯＭ）の商標です。

ふたりでもんはん　上編

「ね。時間ある？」
ピタ、と周囲のざわめきが止まった。
二限目と三限目の間の休み時間は少し長くて、たいていの女の子はおしゃべりに興じていたりして、気の早い男子生徒なんかは早弁とかしてたりする時間。
普段は誰も話しかけてなんか来ないし、僕も小説の続きとか読んで予鈴を待ってたりする。
顔を上げると、そこには、
女神がいた。
冗談でも何でもなく、目の前にいるのは姫神万理沙、生徒会副会長。
通称メガミ。
二年生なので、一コ上の先輩でもある。
騒ぎが大きくなる前に、立ち上がることにした。
「はい。もちろん」
教室の扉を閉めた途端、どういうことだーナニナニいまのキャーｅｔｃ．の声が後ろから聞こえてきた。

連れていかれた先は屋上だった。
普段は閉鎖されているはずだが、生徒会の特権よ、とスカートのポケットから取り出されたカギを使って、ギィーと鳴る扉をくぐれば、梅雨明けの真っ青な空が開放的だ。
そのまま、女神は手すりの方へ近づいていく。休みっ時間はもうあと少ししかないはずだが、グラウンドで遊ぶ生徒の声が屋上まで聞こえてくる。
すたすたと前を歩く背中を見つめる。自分より少し低い背丈、腰の半ばほどまである、長く艶のあるストレートな黒髪。右の耳の上にだけあるワンポイントの控えめな花飾りは、女神のトレードマーク

でもある。毎日花柄の色が少しだけ替わっていて、明日は何色か、が話題になるほどだ。スラリとした体型はやや痩せ気味とも言えるほどで、短すぎない程度のスカートからは神の造形としか思えない程の美しいラインを描く両脚が伸びている。あの脚だけで３０回はヌケる。

極め付きは、まさしくこれも神の造形、としか言いようのない、整った小顔。街を歩けば、男の何人かに一人はあれ？どこかでみたような？といった顔で振り向く。

女神はジュニアアイドルだ。いや、正確にはアイドルだった、というべきか。５年ほど前のグラビア雑誌なんかを漁ってみれば必ずと言っていいほど、彼女の小学生時代の水着グラビアが見つかる程の有名ジュニアアイドルだった。ＴＶにも一時レギュラー出演していたし、同じ高校の一年上にいたときはまさか、と思ったものだ。５年前に活動を停止し、それ以来ずいぶんと大人びた顔になったのでそれとは気づかれにくいらしいが。

詳しくは知らないが、お母さんの意向で芸能人生まっしぐらのところを、お父さんが娘の人生を危惧して一切を辞めさせ、こんな田舎へ引っ込んできたらしい。中学生の頃はいろいろと荒れていた、という話も聞くが、今では品行方正、成績優秀な一生徒として学生生活を送っている。

とはいえ、やはり元芸能人というのはいつまでもつきまとうもので、いろいろと言われることもあるらしい。だが、彼女が女神と言われるのはその経歴や美貌のためだけではない。リーダーシップもあり、企画力や実行力もある。他人に比べて豊かな人生経験のためか、相談に乗ってもらう生徒も多いらしい。なにか困ったことやトラブルは副会長に、というのが生徒会でも暗黙の了解であるらしい。

あと、もう一つ「女神」と称される理由がある。誰とも付き合わない、と公言しているのがその理由だ。言い寄る男は後を絶たないらしいが、いちいち返事するのも大変なのだろう。ごめんなさい、高

校生の間はどなたともお付き合いしないことに決めておりますので、が彼女のいつもの返事だ。

転落防止用の高いフェンスに指を絡ませて、女神は外の景色を見つめている。

「かのんくん」

僕の名前が呼ばれる。鈴を転がすような、とはこういう声のことだろうか。

ほぼ毎日のように声は聞いているが、直接会話したり、間近で見るのはこれが初めてだ。

「は、はい」

「ごめんね、昨日は。話してる途中で切れちゃって」

夏を感じさせる強い風に、彼女の髪がたなびく。白いうなじがすぐ近くに見えて、つい昨晩見た彼女の少女時代の水着姿を重ねてしまう。昨夜はあれからあのきわどい水着写真集で2回も・・・

「ええ。そうだと思いました。みんなにはフォローしときましたから」

「ありがとう。昨日のあたし、どうだった？」

「ええ。最後も途中までうまくいってたんじゃないでしょうか。ラストでアルバのバックジャンプブレスにやられなければ、ですが」

「うーん、それなのよね。あれだけ注意されてたのに、ね」

「慣れですよ、慣れ」

「うーん、うまくいかないね」

僕らが話しているのは、ネットゲームの話題だ。

モンスターハンター、略してモンハン。海外ではあまり売れ行きがよくないらしいが、国内では評判が高い。いろいろな武器、防具、アイテムを駆使して、強力なモンスターを倒しては自分が成長していく。

このゲームの難しいところは、単純にキャラクターを鍛えていけばいい、ということではない点だ。操作が煩雑なので、一瞬の油断や

操作ミスが命取りになったりする。
自分がゲームオーバーとなればそれまでなのだが、ネットゲームというのはそうもいかない。他のプレイヤーまで巻き込まれてしまうため、自分のミスがパーティ全体の失敗につながったりする。
そのため、野良プレイヤー達と共闘して戦うのは難しい。他のプレイヤーの技量が分からないからだ。余程気の合うプレイヤー同士はさっさとパーティを組み、一緒に出かけたりする。あとから始めた新参プレイヤーは、古参プレイヤーから見れば下手クソと罵られるだけのこともある。

高校に受かったことで買ってもらったモンハンを始めて2カ月、かなり上達した頃、ふと野良プレイをしていた時に、始めたばかりのプレイヤー、ＪＪと出会った。ＪＪは極めつけに下手だった。マニュアルもちゃんと読んでいないようだったし、操作の基本すら出来ていなかった。なのに口調は強がってばかりで、ほとんどのプレイヤーから地雷認定されるような始末だった。
少し前に、長年パーティを組んでいたプレイヤー達と解散したばかりだった僕は、たまには初心者の手助けもいいさ、と長い時間ＪＪと遊んだ。いろいろと教えてやって、それ以来、たまに一緒に遊ぶようになった。ＪＪはまだまだ下手だったが、フレンド認定を送ってやったら素直に受け入れてきた。
だが、弱いモンスターはそれでいいものの、なかなかＪＪは強いモンスターには歯が立たなかった。プレイしている最中はなかなか会話をキーボードで打つのも覚束無いので、細かい点が修正しにくい。
ある時、上位リオレイアに3死したＪＪに、つい提案してみた。
「なあＪＪ、おまえＳｋｙｐｅとか持ってる？」
「は？なにそれ」
「電話みたいなもんでさ、プレイ中に実会話したりするやつ。パソコンとかある？」
「あるけど、めんどー」

「無線ＬＡＮあれば無料でＳｋｙｐｅできるから、ちょっとアカウントとってみて」
「おｋ」
そこから2時間あまり、拙いキーボードでのやり取りを終えて、僕のＳｋｙｐｅに「ｍａｒｉｓａ」というアカウントから連絡が来た。繋いでみてびっくりした。ＪＪはずっと男言葉だったので男認定していたんだけど、実は女、それもかなりかわいい声だった。中学生くらいかな、と思った。
Ｓｋｙｐｅ通信を初めてからは細かな部分まで会話が成り立つようになり、ＪＪのプレイヤースキルはみるみる上達した。他のパーティに顔を出すことが減って、ついつい声が聞きたさにＪＪが来るのを待って、Ｓｋｙｐｅを繋げてしまう。僕のキャラクター「Ｃａｎｏｎ」がパーティを組んでいる他のプレイヤーにも十分に紹介できるレベルになり、それでもＳｋｙｐｅでの会話は二人だけだった。なんとなく、他の誰かにこのかわいい声を聞かせたくなかったし、みんなＪＪのことは男だと思っているようだった。
つい2週間前、ふとしたことでＪＪが地元のスーパーの名前を言っている時に気づいた。この可愛らしい声、そしてｍａｒｉｓａというＳｋｙｐｅアカウント名。
「ふく・・・かいちょう、さん？」
「あれ？バレましたか？かのん教官はリアルお知り合いさんでしたか？」
「はい、あのう、僕Ｎ高の一年生で」
「あら、それは知らなかった。偶然ですね」
「すみません、先輩とは知らず、いっつも命令口調で」
「いえいえ、教官は教官ですから。で、誰君ですか？」
「一年Ｃ組の今宮といいます」
「今宮くん、ですか。これからもよろしくお願いします」
「こ、こちらこそ！」
そんなわけで、ちょっとＪＪとの間柄は微妙に変わった。でも、そ

れからもゲーム内で待ち合わせては、一緒に狩りを続けている。

「アルバの角折りは１０分かからなかったのに・・・」
「ですよね。ハンマーもうまくなりましたね」
風が強くなる。女神は軽く髪留めを押さえる。いちいち動作が絵になる人だ。
「教官がうまく、振り向きで麻痺ってくれたから。麻痺行くよーって行ってくれたから溜めてたし」
「あとの二人は麻痺無しでしたからね、ちょうどタイミング合わせたんですよ」
「うん・・・ってだから教官、敬語はいいって言ってるのに」
「ここはリアルですから」
「じゃあ、ゲーム内でもやめてくれる？」
「いやあ、中の人が誰かって分かっちゃうと、どうしても、ですね」
「今まで通りで良かったのに・・・」
「はは。そうも行きません」
じっとりと汗が出る。普段あまり女の子と話す機会も少ないのに、学園の頂点に立つ美少女が目の前だとどうしても緊張してしまう。普段話してるＪＪだと思えばいいんだろうけど。
「ちゃんと、前みたいな命令口調でお願いします？」
初めてこちらをまっすぐに見つめてくる。いや反則だろこれ。見とれちゃうだろ。
「ど、努力します・・・」
「ほんとにー？」
口元をすぼめて、人差し指の先を軽く噛む。もうたまりません。
努力はしますが、畏れ多くてできません。ていうか、女神とほぼ毎日スカチャしながらゲームしてるってバレただけで、三年生の怖い人達とかからどんな目にあうやら。
「だ、だから、リアルでは知らんぷりってことでお願いしたはずなんですが」

「ああ、そうそう。ごめんね、呼び出しちゃって。カノジョさんに怒られるね」
「いませんしこれからもありえません」
「そうなの？かのん教官、優しいのにね。って、もう予鈴か」
タイミング良く、きーんこーんかーん、と予鈴が鳴り響いた。
「戻りますか」
「ん。じゃ、要件だけ。これパパにもらったチケット。今週日曜９時に大宮駅集合、誰にも言わないこと。いいですか？」
手のひらに細長い紙切れが押し付けられる。は？ナニコレ？
「がんばろうね、教官！」

四限目は数学だった。好きな分野のはずだったが、うまく頭に入らない。
机の下から、何度目か分からないがチケットをそっと取り出して見る。

「モンハンフェスタ　２００９　　最強ハンター決定戦！」

場所は東京ビッグサイト、受け付け時間は１０時から。
フェスタってのは知ってる。二人一組で、会場に設けられたブースでモンスターを倒す。
より短時間でモンスターをハントできたものが勝ち。
ウワサは聞いていたが、まさか自分が出場するとは思わなかった。
それも、女神と。
というか、だ。
ビッグサイトまででかける、ということは。
デート、だ。たぶん二人で。
女神とデート。女神とデート。デートが女神。

人生初デートが、女神と。
この学園の男ドモの、誰もが一度は夢想した「女神とデート」のチケットが、いま僕の手の中にある。
休み時間が終わって、教室に帰ってきた時に浴びせられた視線を思い返す。嫉妬、興味、怒り、羨望、それらがないまぜになった視線という名のレーザー。これはもう、誰も見せられない。周りが全て敵だ。
そっとチケットをサイフの一番奥にしまう。

「直樹、なに話してたの？女神センパイと」
数学の授業が終わり、昼メシ時になってから、二つ隣の席の美沙がやってきた。
「おうおう。オメーに女神様がなんの用があるってんだ？」
少し離れたところから、タカシまでやってくる。
「いや、その、生徒会に出す文化祭の企画プリント、無くしちゃったもんで」
「は？それだけでわざわざ副会長が会いに来るの？なんで？」
美沙は詰め寄ってくる。
「ハハハ。おい美沙、油断したら女神様に直樹がとられちゃうぜ？」
「な、なにいってんのよっ！そんなわけないでしょっ！」
美沙がいつもどおりのデカイ声で叫ぶ。
「怒んなよ・・・まあ、女神様はカレシ作らないって断言してるしな。残念ながら」
タカシがややひるんだように言う。
「別にあたしは直樹がどうってんじゃないわよ！心配しただけなの！」
「はいはい分かってますって。で、ホントにそんな用事だけで女神がわざわざ？」
「あ、ああ。うん。昨日生徒会室に行ったら、明日渡しますって言われたから」

タカシはふんふんと頷いているが、美沙はまだ疑っているような顔つきだ。
「あの人も義理堅いお方だねえ・・・しかしこのオレの魅力に気づかないとは・・・くーっ、もったいねーぜ！」
「あんたの魅力なんてどこにあるのよ？」
美沙の一言に、タカシは動じる様子もない。
「おめえみたいなお子ちゃまには、オレの大人の男が醸しだす、深い味わいにはだな・・・」
「加齢臭の間違いじゃないの？最近アンタクサイわよ？」
さすがにこれには傷付いたのか、タカシはぐっ、と変な声を出して黙りこむ。
「直樹、嘘ついてないよね？」
美沙はまっすぐな瞳で見つめてくる。ごめん、美沙。
「うん、本当だってば」
「そ。じゃあいいけど」
他にも聞き耳を立てていた奴らがいたが、概ね納得したらしく、みんなパラパラと弁当を広げだす。
なんとなく居心地が悪くなり、中庭の木陰で食べるか、と弁当を持って立ち上がった。

「んじゃ教官、今日もよろしくね！」
Ｓｋｙｐｅから元気な声が聞こえてくる。
とりあえず剣道部の練習が終わって、道場拭きをさせられてから家に帰り、ごはんを一人で済ませる。父親は単身赴任でいないし、企業の研究員をしている母親はたぶんまた夜中だ。
Ｗｉｉの電源を入れ、同時に携帯からＳｋｙｐｅも立ち上げる。待ってましたとばかりにｍａｒｉｓａから通知がやってきて、一緒にロックラックにログイン。一人部屋を立てて、とりあえずそこで待ち合わせる。
Ｓｋｙｐｅでは女神の声が、画面ではＪＪ「おう、よろしくな教官

！」という表示が。
相変わらず、ＪＪは男キャラ、で通すらしい。
「今日はごめんねかのんくん。いきなりでびっくりした？」
「ええ。もう、帰ってからみんなの嫉妬で大変でした」
「またまた。持ち上げなくていいよ？」
「本当ですって」
「はいはいありがとう。で、どう？日曜、都合つきそう？」
「先週部活の大会が終わったとこなんで、今週は休みなので大丈夫です」
「カノジョさんとかは？二人で出かけたら怒られちゃったりしない？」
あ、やっぱり二人きりなんだ。
「いませんってば」
「そ。良かった。じゃあ、あと三日、がんばって鍛えようね！」
「本当に出場するつもりなんですか？」
「あ、私じゃやっぱり役不足？」
「いえ、そうじゃなくて、親御さんとか大丈夫かなーって」
女神がつきあわないのは、彼女が決めたのではなく両親の方針、とか聞いたことがある。
「うん。最近ゲームが面白くて、って話をしてたら、パパがチケットもらってきてくれたの。もちろん、女の子と行くってことになってるけど」
「・・・バレたら僕、殺されませんか」
「バレないバレない。信用あるから、私」
「・・・ならいいんですけど」
「んじゃ、決まりだね！」
女神の声は嬉しそうだ。
「で、今日、どうします？昨日のフレはまだ来てないみたいで・・・」
「うん、教官が良かったら、ちょっと二人で狩る練習でどうでしょ

うか」
「そうですね。三日後に勝つためにも、二人狩りにも慣れないと、ですね」
「ん！じゃあ、れっつごー！・・・の前に」
「はい？」
「かのんくん、携帯持ってる？」
「ええ」
「ソフバン？」
「ええ。ｉＰｈｏｎｅです」
「すごーい！あたしも欲しかったのに、ママがだめーって」
「うちの両親、そういうの好きなんで」
「じゃあ、ＳＭＳ交換しない？今日もかのんくんがいつ来るかなーってもうずっと待ってたの」
「もちろん、いいですよ」
「じゃあ、番号言うね。０９０－ｘｘｘｘ－ｘｘｘｘ」
「はい。メッセ送りますね」
「おっけー。・・・きたきた。携帯番号いれとくね。これで待ち合わせも大丈夫だね」
「ですね」
・・・女神の携帯番号までゲットしてしまった。しかもメールＯＫって。
こりゃ、携帯もうかうか他人に見せられないな。とりあえず、名前はＪＪって登録しとくか。
「じゃあ、はりきっていこー！」
「いきましょー！」

「うーん、なんかこう、物足りないね」
翌日の昼休み、またも屋上。
今日はお互い弁当持参で、というメールが朝入り、弁当とピロティーで買った牛乳も持って屋上に来てみると、女神はもう待ち構えて

いた。
「そう、ですか？ずいぶんとうまくなってましたけど」
そう、ＪＪはうまくなった。もう初心者とは言えないし、閃光玉一発でベリオロスも落とせるようになったし。
「そうね、ハンマーと太刀はずいぶん練習したし。でもさ、いざフェスタに出て、敵はボルボロスです、武器は大剣とランスです、とか言われちゃうことだってあるわけじゃない？」
「それはありえますね」
どちらも、女神の苦手な組み合わせだ。ガード可能な武器が苦手らしい。
「かのんくんはボウガンでほとんどのモンスはソロいけるし、他の近接も一通りクリアしてるけど、あたしは上位作って、やっと村クリアしたくらいだからなあ」
「それでも十分だと思いますが。・・・まさか」
「もちろん！優勝を狙うわよ！」
一瞬、女神が某アニメキャラに見えた。錯覚だろうが。
・・・それは目標が高いなあ。
「いや、いくらなんでも優勝は」
「そうなるには、もうこれは絶対、すごいベストパートナーだなって言われるくらいの連携プレーが必要なのよ！」
女神は箸を握り締め、両手でこぶしを作った。上下に揺れてる。
「Ｓｋｙｐｅで十分に話は通じてますし・・・」
「それじゃダメなの！ほら、Ｓｋｙｐｅしてる最中って、ちょっと息止めてるでしょ？」
「それはまあ・・・」
声が聞こえるということは、ちょっとした咳払いとか、大きな声では言えない生理現象の音とか、わずかに遠慮はしてしまう。
「もう、全部ひっくるめて互いの状態が分からないとダメなの！そうでしょ教官！」
瞳が輝いている。真剣な眼差しだ。

・・・彼女、ハンドルを握ると豹変する、とかそういう人じゃないだろうな。
普段の穏やかな、女神と称される落ち着いた雰囲気は今どこにもない。
「でも、Ｓｋｙｐｅで限界じゃないですかね。一緒にプレイしているわけじゃないし」
「それよ、かのんくん」
「は？」
「フェスタでは一緒に並んでプレイすることになるでしょ。それが、普段は声だけを頼りに、お互い別々の場所で、別々のモニタを見ながらプレイしている。お互いが見ている画面も、ネットを通じて送られてくる、ちょっとタイムラグのあるプレイを見ていることになるわ」
「ええ、それはそうですが・・・」
「だから、一緒にプレイすべきなのよ。本番と同じように、ね」
「え」
「今日、何時に部活終わる？」
「え、えーと、１９時にはたぶん」
「ごはんとお風呂は？」
「２０時には・・・」
「じゃあ、２１時にしよう。２１時、あたしの家に来て」
もうずいぶんと前から箸が止まったままだ。いや、この状況で喰える奴がいたら教えてくれ。
「そ、そんな時間に自宅にって、ご両親は一体」
「うちは二世帯住宅だから、おばあちゃんところは今実家の手入れに行ってていないの。あとで携帯に地図送っとくから、右側の家の勝手口に来て。メールくれたらすぐ開けるから」
「Ｗｉｉはどうすれば」
「おねえちゃんのを借りる。ディスクとキャラだけコントローラに入れて持ってきて」

どんどん話が進んでいく。
「テレビはどうすれば」
「おばあちゃんちには3台あるから、夜になる前に移動させとく。なんならごはん用意しといてあげようか？お風呂も入ってく？」
「いえ！いえ、それは遠慮しておきます・・・」
「じゃあ、２１時に間に合う感じで。いいかな？家、出てこれる？」
「うちは放任主義なんで」
「決まりね！待ってるから、なるべく早く来てね！」

今日に限ってやけにシゴキがキツいと思ったが、最後に副主将から一本を立て続けにとって、上級生向けに顧問の先生から説教が始まったところでお開きとなった。いつもどおり、カラカラになった唇を直接水道口につけてんぐんぐ、と水を飲んだところで二年の先輩がやってきて、おい今宮、てめー昼休みに姫神と廊下でしゃべってただろ、それ三年の人に見られてて、んで東さんにシゴかれたんだぜ、と言う。その言葉で逆に、同じ一年のみんなの視線が敵意を帯びる。もうごめんなさい勘弁してください。
ていうか今からその姫神さんの実家に夜遊びに行っちゃうんですが、二人きりでゲームとかしちゃうんですが、なんてことを言ったらどうなるんだろう。とりあえず半殺しの上、今晩は道場に一晩正座、とかになるだろうな。
着替え終わるとチャリに飛び乗り、猛ダッシュで誰もいない家に戻る。母親が作りおきの夕食を3分で流し込み、シャワーで念入りに汗を流す。万が一にも気が狂ったりしないよう、一発放出しておき、ついでに微妙な部分も念入りに洗う。もちろん使う予定は一切ないが。
シャワーを終えてタオルで拭き拭きしていると、携帯が鳴る。普段は一切鳴らない。

（終わった？）
ＪＪからだ。
（全力でシャワー終えました。今から全速力で行きます）
（待ってる～。家の場所はＥメールで）
言うが早いか、ＥメールでＧｏｏｇｌｅマップの情報が送られてくる。一つ向こうの町だが、チャリで走れば１５分ほどだ。
（行きますねー）
そう入力すると、念のための書置きを残し、Ｗｉｉのコントローラを持って玄関を出た。

「いらっしゃい！かのんくん、早かったねー」
「待たせていると悪いんで」
「ささ、どうぞどうぞ？」
「お邪魔します」
そう言うと、薄暗い勝手口から中に入る。ひんやりとした冷房がありがたい。
居間に入ると、小さい電気が付いていて、液晶テレビが2台、きちんと並んでいた。その前にはＷｉｉもちゃんと揃っている。
「疲れたでしょ。どうぞ」
お盆の上にはやけにでかいコップがあって、なみなみと麦茶が注がれている。
女神は普段見ない、キティちゃんがプリントされた白地の半袖Ｔシャツに黄色い短パン。
普段はスカートに隠れた太腿の部分まで丸出しになっていて、めちゃめちゃ目に毒だ。
「うわ、ありがとうございます！」
「いいの。お客さんなんだから。まだ暑い？」
エアコンのリモコンを壁から外し、ピコピコと操作している。
あーいいなこういうの。こんな美人にお茶を出してもらう機会が、今後一生に一度でもあるだろうか。いやない。

女神自身もお風呂に入りたてなのか、まだ長い黒髪はしっとりとしていて、いい香りがここまで漂ってくる。
「めが・・・えっと、ＪＪさんも」
「まりさ」
「はへ？」
「まりさ、でいいよ。かのんくん」
「いやそんな、下の名前なんて、畏れ多い」
「なに言ってんの。同じ高校生でしょ？」
「副会長、でいいですか？」
「だめです」
「じゃあ、せめてＪＪで」
「はい。それで結構です」

テレビの前のソファに並んで座り、そろって置いてあるテレビとＷｉｉをポチすると、俺は持ってきたディスクを「お姉ちゃんのほう」のＷｉｉにに差し込んだ。間もなく起動音がして、ゲーム画面が立ち上がる。無線ＬＡＮも設定してあって、すぐにロックラックだ。
「どこで待ち合わせましょうか？」
彼女はすでにログインしている。部屋はまだ入っていない。
「シンシア２－１０－３０あたりで」
いつも待ち合わせいてる場所だ。
「一人部屋、立てておきますね」
「お願いします」
「さて・・・なに練習いきましょっか」
「苦手な奴から、ですね」
「私は得意なのが少ないですが。・・・ラギアいきましょうか」
「いいですよ」

３匹目となる、雷龍ラギアクルスをＣａｎｏｎの片手剣がザクザクと切り刻み、彼女は苦手な大剣に挑戦して頭付近で溜め３攻撃を狙

う。
「そこだと外れます」
「えっ？」
画面の中で雷龍は、上を向いてモガモガともがいている状態から立ち直り、何もない水中をＪＪの剣が素通りする。
「あ！ほんとだ・・・」
「大剣は溜めが命ですが、先に先にタイミングを読まないと逆にダメが減るんです」
龍は水中を突進してきて、ＪＪの大剣がそれをガードする。わずかに切れ味がダウンする。
「あ、砥石使わなきゃ・・・」
「今はダメです。ちょっと待ってください」
Ｃａｎｏｎの一撃で尻尾が切れ、龍が怒ったように移動していく。
「今です。どうぞ」
「は、はい」
女神はソファがあわないのか、フローリングの床にぺったん、と座っている。両脚の内側とおしりが直接床についていて、なかなか柔らかい身体のようだ。
ＪＪが砥石を取り出して、水中でしゃき、しゃき、と剣を研ぐ。
すぐに移動して、次の攻撃をかわした。
「おおっ、ギリギリかわせた～」
「ですね。次閃光投げます」
すでにＣａｎｏｎはアイテムを投擲態勢に入っている。パッと画面が輝いて、龍の頭の上にピコピコと星が回った。
「ここで溜め３、行けます」
「あうう・・・ちょっと待って」
もたもたと水中を泳いでいったＪＪは、ようやく溜め動作に入る。
「もうだめです。２で解放してください」
「はいい」
ズガン、と音がして、海竜の角がへし折れた。龍はまた腹を上にし

てもがく。
「罠行きます」
「はい」
「麻酔玉用意して」
「あうあう、待って待って」
カチカチカチ、と彼女が操作する。が、目当ての赤い玉になかなか行き当たらない。
「投げます」
「はいっ！」
捕獲しました、と画面にテロップが出て、クエストの終りを告げる。
「はーあ、疲れたあ」
「お疲れ様でした」
コントローラを置き、まだ氷が浮かんだままの麦茶を一口いただく。女神はやや不満なのか、うきーと奇妙な声を出して頭を抱えている。脚が生えている黄色い短パンをもう一度、ソファの上から盗み見る。ここだと彼女の背後なので、じっと見つめていても気づかれない。短パンのふちはぴったりではなくて、少しばかりひらっとしていて、姿勢によっては中がやや見えそうな見えなさそうな、罪作りな感じでよくない。いや、いい。
「ちょっと休憩しましょうか。なにか食べますか？」
「いや、いいですよ」
「せっかく買ってきたので、ぜひぜひに」
そう言うと彼女は立ち上がり、冷蔵庫へ近づいていく。お盆の上にはスプーンが2つ、プリン、ティラミス、コーヒーゼリー、タピオカ入り紅茶。
「お先にどうぞ」
「いえいえ、お客様が」
「センパイ、何が好きですか？」
「うーん、じゃあ、あたしはティラミスかな」
「コーヒーゼリーいただきます」

「どうぞ。召し上がれ？」
少し小首を傾げる。モデル出身のひとってのは、みんなこういう風な仕草が自然に出るんだろうか。とっても可愛いんですが。
画面には先程倒したラギアクルスの皮やら爪やらの材料が出ていて、適当にボックスに投げ込んで一旦街に戻しておく。それからゼリーの蓋を開けた。
「いやあ、間近で見るとかのんくん、いや教官、本当に上手ですねえ」
「そうですか？ＪＪも十分上手ですよ」
「操作も早いねー」
「まだまだうまい人は一杯いますよ。俺なんてまだランク４００台ですから」
「あたしも一応１００台になったけど、まだ気持ち的にはランク３０台くらい、な感じだなあ・・・さっきもタメ攻撃、３回くらいしか当たってないし」
「無理に溜めを狙わなくていいんです。大剣の場合、なるべく相手の動きを読んで、ガードせずにかわして」
「うんうん」
「そのうちに、相手がどこで止まるか、みたいなのが分かってきますから、そこで当てる、と」
「それがうまく行かないのよね」
「５０分間、攻撃せずに躱す練習してると分かってきますよ」
「そ、そっか・・・それはそれでしんどいね」
女神もソファに座りなおして、ティラミスを少しずつ口に運んでいる。また笑顔が戻ってきた。
「どんなモンスが出てくるかな」
「連続形式でしょうね。一匹じゃなく」
「うう、それは・・・」
「ギギネブラはないんじゃないかと。あれ、闘技場にもあまりいませんしね」

「私あれ苦手。なんかぬるっとしてるっぽくって」
二人してあはは、と笑う。
「確かに気持ち悪い、あれは」
「だよね！もう、近寄らないで！って感じ」
「タマゴ生んだりしますし」
「あの場面だめ、生理的にダメって気がする」
「捕まってちゅうちゅう吸われたりとか」
「うわっ、やめてその話題。もう泣きそうなのいっつも」
「あはは」
どうやら、女神にもいろいろと苦手なものがあるらしい。
「あのちっさなギィギも噛んでくるし」
「ああ、あれもうざいですね」
「うん。離してよー！ってたまに叫んじゃう」
普段は二口くらいでばばばっと食べてしまうゼリーを、わざとゆっくり食べる。なんとなく、これがなくなったら女神との会話も消えてしまう気がしたから。
落としてある、薄暗い照明の下でゼリーを見つめる。あと半分くらいかな。
「かのんくんは、どの武器が一番得意？」
「うーん、どれもそれなりに。元々は大剣使いですけど」
「あれを使いこなすのかー。攻撃を初めてから、振り下ろすのに時間がかかる気がするのよね」
「それも計算のうちですよ」
「うーん、そうなんだろうけど・・・」
「最初は弱いモンスで練習すればいいんです。ジャギィとか」
「うん、ハンマーもそう言ってもらって練習したよ。ジャギィで。でも、ドスジャギィにもうまく当てにくいのよね」
「だんだんできるようになりますよ」
彼女はティラミスを離し、再びＷｉｉコントローラを握った。一人でドスジャギィの討伐、を選択する。

画面が数回切り替わって、エリマキトカゲを巨大化したようなドスジャギィが接近してくる。女神はえい、えい、といいつつ操作しているが、確かにあまりうまく頭に当たっていない。
「そこで」
「えっ？」
「溜めはじめます」
「えっ、はい」
「もう遅いです」
「ええーっ！」
「左に転がって」
「えっ？えっ？」
「横殴りは出さないで」
「うぇーん」
ついに泣きが入り始めた。
「かのんくん、ちょっと持って」
「へ？」
「一緒に操作、して」

女神は画面を見つめたまま、コントローラを握ったままこちらへ差し出す。
「早く早く」
「は、はい」
思いっきり手を触ってしまうんだが。いいんだろうか。
ふと見ると、女神は興奮しているせいか、右足はソファから床に下ろし、左足はあぐらをかくように折り畳んでいる。両脚の付け根部分、黄色い短パンの隙間から、黄色ではない何かの色が見えた気がして、鼻の奥に何かがぐっとつまった。慌てて目を離す。あとで後悔することは必須だ。

おずおずと彼女の上から手を重ね、コントローラを操作する。半分くらいに減った体力をそのままに、二三度回転して敵の攻撃を避ける。
一旦剣を収納し、敵を狙う・・・がうまくいかない。やっぱり操作しにくい。
だが、なんとかトカゲの頭を麻痺させ、その上に溜め攻撃を振り下ろしたところで、決着がついた。
「ふー」
「さっすがー！教官、うまいうまい？」
「いや、でも、やりにくいっすね」
「そう？今ので、だいぶタイミングとか分かったよ？」
「そうですか？」
「でも、もう一回やって欲しいな。微妙なタイミングとか、ああやってもらえたら全部分かりそうな気がする」
「いやでも、操作しにくいような」
「じゃあ」
女神はずるずるぺたん、とソファからずり落ちた。そのままずり、ずり、と自分の前に移動してくる。
「はい、これでよろしく」
女神は俺の両足の間に入る形になり、コントローラを少し上に持ち上げた。俺が操作しやすいように。
・・・
・・・
あの。
股間が。
女神の後頭部が、股間の何やらにつきそうなくらいなんですけど。
心持ち、お尻の位置を後ろに修正する。
カチャカチャ、と女神はクエストを選択し、再び先ほどのドスジャギィの上位種、ドスバギィの討伐を選択する。
「はりきっていきましょー！」

クエスト嬢のセリフを真似する女神様。
ええい、どうにでもなれ。
「じゃあ、いきますよ」
「はーい？」
二度目となる、彼女の手を上から握る。
真剣な眼差しで画面を見つめているであろう彼女。の後頭部を、ふしだらな目で見つめている俺。
先程感じた、かぐわしい香りが髪から立ち上ってくる。どっきん、と胸が大きく高鳴る。
これ、そおぉーっと髪に鼻をうずめてくんくんしても、気づかれないんじゃなかろうか。
画面が切り替わって、ＪＪが走りだす。

「早いねー、もう終わっちゃったよ」
画面では、青い色をした恐竜が無様に転がり、ＪＪは近くにあった鉱石をカンコンと採取している。
確かにこの態勢は操作しやすかった。普段の一人プレイに近い感じに。
「あんなふうにいつも避けてるんだねー」
「ええ。ぶつかる、と思った瞬間に回避するんです」
「あたしはいっつもぶつかる！と思った瞬間、もうぶつかってるよー」
「それの繰り返し、ですよ」
ちょっと汗をかいてしまった手を、名残り惜しく彼女から引き剥がす。
時計をみると、すでに２３時半になっている。
「センパイ、そろそろ・・・」
「ん、そうだね・・・もうこんな時間だね」
「ですね。明日も学校ありますし・・・」
「じゃあ、あと１回だけいいかな。あたしジョーが苦手で、なかな

か一人で倒せなくって」
「ええ。いいですよ」
「じゃ、今の感じでよろしく！」
「大剣でいいですか？」
「うん！」
「じゃ、いきまーす」
俺は、三度目となる彼女の手を握った。

「ふえー・・・堪能したー・・・・」
「お疲れ様でした」
「いやあ、もうなんていうか、すごいよ、かのんくん」
「そうでもないですよ。ポット3本使っちゃったし、最後捕獲に逃げたし」
「もう、緊張しちゃったよ」
手を離そうとして気づいた。二人の手には汗がびっしょりとついて、まるで接着したかのようだ。
いつの間にか操作に集中しきっていて、完全に女神を背後から抱きしめてしまっている。
最初は気を使って離していた身体も、股間が背中に押し付けられてしまっているし、なんというか、背中を挟みこんでいる状態だ。
前を見下ろす。広く開いたTシャツの隙間から、ピンク色のブラが完全に見える。完全に。
だめだ、身体を離さないと。今すぐ。まだ理性が残っているうちに。
「かのん・・・くん・・・・」
「セン・・・パイ・・・」
「あんたたち、何やってんの」
突然、部屋の電気が明るくなった。
反射的に立ち上がり、声のした背後を振り向く。同時に、女神を背

中側に隠す。
そこには、女神によく似た女性が立っていた。
「お姉ちゃん・・・」
そうか、女神のお姉さん、か。道理でよく似ている。女神をもっと大人にしたような顔立ちで、やや背も高い。それに、こう言っては何だが、女神は身体の凹凸があまりない。目の前の女性は、はっきりと分かるような豊かな胸をしていた。
「まりさ、夜中に男の子とラブラブでゲーム？感心しないね」
姉、と呼ばれた女性はバスローブのような服を着て、やや険しい眼差しをこちらに向けている。
「ご、ごめんなさい、お姉ちゃん」
「ゲームが壊れたから貸して欲しい、って、こういうことか」
「すみません」
俺も頭を下げる。
ふふ、とお姉さんは笑った。
「君まで謝らなくていいの。別に怒ってるわけじゃないわ。いや、正確に言うと少し怒ってる。でも、まりさが男の子に興味があるなんて思わなかったから、ちょっと意外だった、かな」
「申し訳ありません、こんな夜分に」
「だからいいって。別にセックスしてたわけじゃないでしょ」
「せっ・・・」
「あら、そういう雰囲気だったのかしら？ずいぶんとぴったり寄り添っていたみたいけど。まりさ、彼氏がいたならちゃんと紹介してくれればいいのに」
「そ、そんな、彼氏とかじゃなくって、その、かのんくんは」
「かのんくん、って言うの？日本人だよね？」
「それはあだ名です。いまみやなおき、と申します。あの、これは全部自分のせいで」
「大方あれでしょ、まりさが勝手にいろいろと決めちゃって、引くに引けなくなったんでしょ」

「・・・はあ」
「おねえちゃん！」
「図星、かな。まあ、この子はいつまでたってもわがままなんだから。ごめんなさいね、ナオキくん」
「いえ、とんでもありません」
「礼儀正しくていい子ね。でもね、まりさ」
お姉さんはソファの方へ近寄ってきた。女神はまだ、ソファの前の床に座り込んだままだ。
「彼を信用しないわけじゃないけど、夜中に男友達を部屋に呼ぶ、ってことがどういうことか、あなたも知らない歳じゃないわね？あなた一人がいい気になっているうちに、レイプされちゃっても文句は言えないのよ」
「おねえちゃん！失礼よ！」
「れい・・・あの・・・」
「そんな気はなかった、とは言わせないわよ。勃ってたでしょ、さっき」
「たっ・・・」
思わず股間を押さえる。もう、阿呆のように何も言い返せない。
「彼は別、そんな風に思っているとしたら、今夜何もなかったことを彼に感謝するのね。男の子がそういう気持ちを押さえるのって、本当に大変なんだから」
よくご存知で。そう言いたいが、言える雰囲気ではない。
「さあ、大きな声を出さないの。母さん、起きちゃうわよ。こんなところ見られたら、母さんがどんな顔するか。ごめんなさいね直樹くん、今日のところは帰ってね」
「ええ。はい。もちろんです」
「まりさ」
「・・・はい」
普段は他の生徒を圧倒する副会長も、姉の前ではまるで借りてきた猫のようだ。

「さあ、お開きよ。あとは私たちがやっておくから、直樹くんは勝手口へ」
「はい。あの、本当にスミマセンでした」
「はいはい。これからもこの子をよろしくね。まりさ、お送りしなさい」

「ごめんね、かのんくん。こんなことになってしまって」
勝手口を抜けたところで、女神はそっと言った。
「いえ、自分にも落ち度がありますから」
「本当にごめん。また今度、ちゃんと謝るね」
「いいですよ。いろいろとごちそうさまでした」
チャリは門を入ってすぐのところに停めてある。
「じゃあ、俺はこれで」
「気をつけてね。本番、頑張ろうね」
ふわり、とした感触が左の頬に触れた。
夢のような、嘘のような時間。
それが女神のキスだ、と気づいた時には、もう女神の姿は見えなかった。

「うーむ、ねみー」
俺は三限目が終わると、机に突っ伏した。
「もう、ゲームしすぎじゃないの？何時に寝たのよ？」
さっそく美沙がつっこむ。
「おうおう、またモンハンのやりすぎか？それともあれか、自家発か？」
タカシがちょっかいを出しに来る。
「自家発？なんかまた作ったの？」
美沙は勘違いをしているが・・・まあそのままにしておこう。正確に説明して、眉を吊り上げて怒られるのも面倒だ。

「お子様美沙には分からねーこった。でもよ、オメー昨日ロックラック来なかっただろ？」
そりゃまあ、隠密にしてログイン隠してたし。女神様と一緒だったし。
「いろいろと人生に悩むことがあってな」
適当にそう流しておく。
「ハハハ、オメーでも悩むことがあるんかい？俺なんて、毎晩宇宙と人類の未来についてだな」
「タカシ、うるさい」
美沙にぴしゃっと言われる。
「直樹、大丈夫なの？」
「ああ。単なる寝不足」
まあ正確には、いろいろな刺激が多すぎる夜だったので、家に帰ってから思い出してヌきまくったのだが。というわけでタカシの邪推は当たっている。
今朝はメールは来なかった。ということは、女神はまだ昨日の夜のことを引きずっているのか、それとも・・・
授業中の携帯・メールは使用禁止。生徒会で投票の結果決めたことだ。休み時間は一応認められているので、休み時間のたびにちらちらと携帯をチェックしているのだが、やはり何のメールも来ていない。
「まあ、次は自習らしいからな」
「え？」「マジ？」
美沙と俺は同時にタカシの顔を見つめる。聞いてないぞ。
「ああ。A組が二限目世界史だったらしいが、なんか高安のヤロー、今日は出勤してないらしいぜ」
脂ぎった顔つきの、世界史担当の教師の顔を思い出す。美沙も同時に思い出したのか、わずかに顔が歪んでいる。あのアブラ顔は、どう考えても女生徒に人気があるとは言えないだろうな。強制わいせつに近いセクハラした疑いもあるって話だし。

「というわけで直樹、オメー寝とけ」
「ああ、そうだな」
ズボンのポケットでバイブが動く。メール着信あり、だ。即座に予鈴が鳴り響く。
さすがは真面目な副会長。ギリギリ休み時間内だった。ちゃんと生徒会則は守った、ってことか。

「昨日はごめんなさいね」
開口一番、女神はそう言った。
「お姉ちゃんには昔っから、頭が上がらなくって」
ちろっ、と小さく舌を出して微笑む。良かった、昨日のことはもう引きずっていないようだ。
「いえ、あの、後で叱られたりしませんでした？」
「ううん、大丈夫。お姉ちゃん、理解あるから。それよりも」
「いえ、気にしてません。ご家族なら、心配されて当然ですから」
レイプ未遂扱いされたのはもちろん始めてだが、まあ、心当たりが皆無だったかといえばやや後ろめたいし。
「本当に失礼な言い方をしてしまって・・・かのんくんは教えにきてくれただけなのに」
「ええ。でも、軽率でした。夜遅くに女性宅へ行くってことは、そういう風に思われて当然ですから」
なんか、当然ばっかり言ってるな。
しかし、あの時にお姉さんが来なかったら、と思うと・・・どうしても謝ってしまう。
ふと、女神は黙り込む。俺もなんとなく居心地が悪くなって黙る。
「率直に言ってしまうんだけど・・・」
「はい、何です？」
「私、かのんくんのことはとても頼りにしているし、一所にゲームなどするのもとっても楽しいの。ただ単に上手いとかだけじゃなくて、ちょっとした会話なんかもとっても楽しいの。でも」

ええ、その先は言わなくても分かってます。
「でも、そういう関係を望んでるんじゃないの。ごめんね。誰ともつきあったりする気持ちはないし」
「ええ。噂は聞いてます」
「本当にごめん。昨日はその、なんていうか、ちょっと軽率だった。その、あの、教官も男の子なんだなーって」
ああ、背中にカタイモノが当たってましたか。やっぱりバレてましたか。
「だから、お姉ちゃんにもあの後もう一回ちょっと言われちゃって、たぶんかのんくんはその、まあわたしなんかじゃ何もかもしれないけれど、それでもなんだか我慢させちゃったりとか、苦しめちゃったりとかしてたら、申し訳なかったと思うし」
お姉さん、人生経験というか男性経験というか、豊富そうですね。それとも男性心理をよくご存じ、というべきだろうか。まだお若いでしょうに。
「ごめん、何言ってるか分かんないかもしれないけど、あたしが一人で考えすぎるかもしれないし、もしかしてとっても失礼かもしれないけれど、とにかくちゃんと謝りなさい、と言われたの」
「・・・お姉さん、いい方ですね」
「うん、とってもいいお姉ちゃん。で、」
きーんこーん。
予鈴だ。昼休みの終わり。
「ああっ、ごめんなさい、もっと言いたいことがあるのに！かのんくん、今日も部活？」
「ええ」
「じゃ、待ってる！終わるまで待ってるから！帰りは西門から？」
「はい。自転車なんで」
「分かった！西門で待ってるから！」
すたすた、と走り去る女神。いやあの、屋上の鍵はどうすれば。
ていうか、待ち合わせ？女神様と？

・・・バレたらまた、シゴキがキツくなるな。

「今宮ーっ！気合っ！」

「オス！」

7本目の試合が終わったところで、床に膝をついてヒィヒィ言っていた俺は、周囲のセンパイからの声に気合いだけで返事をして、ふらふらしながら立ち上がった。

（今日から、一年キャプテンを決める）

練習の開始前に現れた顧問から、突然の発表があった。

（今年の一年はなかなかレベルが高い。人数も多いしな。一年生だけで意識を高め合い、切磋琢磨するように。今宮）

（はい！）

（お前が一年キャプテンになれ。一年全体のレベルアップのために、足りないところや不備を補うように

しろ。いいな）

突然、名前が呼ばれた。何故？という疑問があるが、剣道部ではセンパイや顧問の先生に言い訳は一切無用、が原則だ。

（はい！ありがとうございます！）

とりあえず、その場は返事をした。

「今宮、悪かったな。オレが推薦したんだ」

普段の倍量疲れた練習後、幹部ミーティングに今日から、参加することになり、一年生で一人だけ残されてしまった。そこでキャプテンの大倉センパイが言った。

「小菅や葉月もうまいが、お前も時々いい攻めを見せる。昨日、東から二本取ったようにな」

いや、あれはもう、破れかぶれというか。もう一度やれと言われても厳しいんですが。

「まあ、寡黙すぎる点はあるが、リーダーシップを取ることも勉強のうち、と思ってやれ。いいな」

「はい、キャプテン」
「よし、じゃあ、しばらくの間は金曜週一回のミーティングにも加わってもらう。一年生の視点から、言いたいことがあったら遠慮なく言え。練習メニューの組み立ても考えろ」
「はい」

クラブハウスを出て、時計をちらっと見る。時刻は２０時３２分。さすがに、もう女神も諦めて帰っているだろう。
薄暗くなった電灯の下、静まり返った自転者置き場に着く。やはり誰もいない。
カタン、とスタンドを上げ、門を出た。
「かのんくん？」
門のすぐ外に、女神がカバンを下げて立っていた。こんな時間なのに。もう外も暗いのに。
「・・・センパイ、こんな時間まで」
「ううん、そうじゃないの。生徒会の会議が遅くなってしまって、逆にかのんくんが帰ったかと心配で」
嘘だ。なんとなくそう思った。
「すみません、遅くなりました」
「いいの。一緒に帰ろ」

たぶん、ずっと待ってたんだ。
明日になればたぶん分かる。『女神が校門で誰かをずっと待ってた』となれば、明日はその話題でもちきりになるだろうから。
いや違うな。明日は土曜日だから、月曜日か。そうなったらもう、みんな忘れているかもしれないな。
「遅かったんだね」
自転車を引く自分に並んで、女神は歩く。徒歩通学だそうだ。

「ええ。急遽ミーティングがありまして」
「そっか。大変だったんだね」
「そうでもありません。剣道は好きですから」
「そうだね。かのんくんは大剣使い、だもんね！」
なんとなく嬉しそうに言う女神。
「門で待ってたりして、いっぱい声とかかけられませんでした？」
「ん？うーん、ちょっと」
女神は親指と人差し指で、宙に小さな隙間を作る。きっと大勢に聞かれたんだ。誰と待ち合わせ？とか。
「生徒会の会議も、大変だったんでしょうね」
「え？ええ。主に修学旅行のこととか、夏休みのこととか、だけどね」
そんなことで、こんな時間になるんだろうか。
「今年は二年生はどちらへ？」
「沖縄ってことになったの。海外って意見も多かったんだけど、円高だしね。でもほら、新型インフルエンザとかも流行ってるし」
「一人でも罹患したら大変ですもんね」
「そうそう。日本に帰って来れなくなっちゃう。だから、今年は国内で、ということになったの」
「沖縄かあ、行ったことないです」
「私は何度か行ったよ。とってもいいところ。仕事で、とか・・・」
ふいに声が小さくなる。モデルの仕事で、ということだろうか。
俺が持っている彼女の昔の写真集にも、沖縄やサイパンで撮影、とかあった気がする。
「うちは忙しいんで、なかなか遠くへは連れて行ってくれませんね。親の仕事がそういうところだったらいいなあ、とか、小さい頃よく考えましたよ」
ちょっと苦しい相槌を打つ。
「・・・そうだね。でも、実際に行くと大変なんだよ。お仕事のスケジュールがいっぱいで、全然観光とかできないの。朝早くからお

化粧の時間、とか・・・」
自分で言ってしまって言い淀んでいる。あまり楽しい仕事の思い出ばかりではなかったのだろう。
「プロですから仕方ありませんよ。むしろ、他の人と違った楽しみかたができて、これから普通の人の楽しみ方をすればいいんです」
「・・・そうだね」
カラカラとチャリを引く音が、薄暗く細い道に響く。ちょっとクサい台詞だったか。
「かのんくん、優しいね」
「へ？いえ別に俺は」
「優しいよ」
言いようのない感情が、胸の奥から上にあがって来た。きっと変な顔になっているに違いない。暗い道で良かった、と思う。
「えーと、しゅ、修学旅行、かあ。僕らはどこだろうなあ」
「一年生は京都・奈良って言ってたよ」
「えーっ、中学と一緒じゃないですか」
「私達も、一年のときはそうだったよ。でも、楽しかったよ？」
「もう、仏像だのお寺だのは勘弁ですよ・・・」
別に神社仏閣が嫌いではないが、あの集団行動というか、意味なく団体でだらだらと過ごす時間は無駄が多い。一般客にも迷惑だろう、といつも思う。
「あはは。かのんくんは、もっと楽しいところの方がいいのかな？好きな女の子と回ったり、とか」
「その話題、お好きですね。いませんので大丈夫です」
「あれでも、ちょっと前にこの道を女の子と走ってるところ、見かけた気がするけど？」
美沙のことだな。
「あれは、同じマンションの腐れ縁住人です。一応あれでも女なんで、遅くなると親御さんが心配するんですよ」
「わーひっどーい、一応だなんて。とっても可愛い子だったよ？」

「センパイに言われると、たぶん誰でも傷つくと思いますよ、その台詞」
「そ、そうかな・・・」
道は大通りに出て、自分はここを右に曲がって行く。女神は大通りを渡って直進だ。
「じゃ、俺ここ右なんで。すみません、遅くなってしまって」
「ううん、いいの。あのさ、かのんくん・・・」
ちらっと腕時計を見る。２０：５２。女子高生には遅い時間だ。家族も心配されているだろう。
「・・・もうちょっと話がしたいの」
「ええ、俺は構いませんよ。でも、時間、大丈夫ですか？」
「うん、お姉ちゃんに頼んであるから。お母さんは偏頭痛で早めに寝てるし。あ、かのんくんは？」
「うちはいろいろあって、母親は1時回らないといつも帰って来ません。父は単身ですし」
「そっか。じゃあ・・・」
大通りをヘッドライトを点けた車が通り過ぎて行く。もうすっかり夜だ。
自転者を止めたまま、女神の言葉を待つ。なにか言いたいことがある、昼もそう言っていた。道すがらの会話のような、取り留めのない話題ではないのだろう。
しかし、時折トラックが轟音で通り過ぎていくこの場所は、あまり話のしやすい環境とは言い難い。でも、昨日の今日で彼女のもう一つの家に行く訳にはいかないだろうし。こんな時間に高校生が学生服着用のまま喫茶店で二人、というのもおかしい。かと言って、コンビニで話すのもあれだし、残るのはカラオケボックスとか？あまり行ったことがないが。
「・・・かな？」
「え？何です？」
トラックよ、うるさい。聞こえないじゃないか。

「かのんくんち、ちょっとだけ、いいかな？」
一瞬躊躇する。昨日の今日だ、お姉さんは怒るだろうな。
部屋は一応大丈夫、部屋は掃除したばかりだし、ヤバい本などは全て隠してある。
「はい。じゃあ、２ケツしていきますか」
「にけつ？」
「後ろに乗って下さい。遠いんで」
「先生に見つかったら大変ね。こんな時間だし大丈夫かな。じゃあ、よろしくね」

「ただいまー」
誰もいない家に向かって、一応言ってみる。予想どおり、母親のパンプスもなかったし、人けは一切ない。
「お邪魔、しますー」
後ろから女神が、これまた誰ともなしに言う。大して広くもない５ＤＫだが、これでも普通のマンションよりはずいぶん広い方だ。階下の美沙の家は、もうちょっと狭い。
「すみません、リビングあまり片付いてなくて。俺の部屋でもいいですか？」
「うん、ごめんね、突然お邪魔しちゃって」
「あんまり片付いてないですよ（笑）」
一旦女神を部屋に通す。・・・良かった、それなりに片付いている。先週母親に大掃除させられたことを、今は感謝だ。
・・・いつもは女神の（小学生の頃の）写真集が本棚に立ててあったりするが、今日は片付けられている。
「ちょっと飲み物持って来ますんで」
すぐにリビングへ引き返し、冷蔵庫からアイス紅茶のパックを出してカップに入れる。お菓子を買わない方針の家なので、つまむもの

はほとんどない。
「お待たせしました」
右足でドアを開け、小さいテーブルにストローを添えて出す。
「ありがとう」
「いえいえ」
エアコンのスイッチをピッ、と入れる。すぐに冷気が流れ出して来て、ムシムシした部屋の温度が下がり始めた。
女神はキョロキョロと、面白そうに部屋の中を眺めている。とはいえ、殺風景な部屋なので机とベッド、本棚、タンスくらいしかないが。
「男の子の部屋って、もっと散らかってたり、ニオイがしたりするもんだと思ってたけど」
「偶然先週片付けたばかりなんです。普段はもっと散らかってます」
「ヌードポスターが貼ってあったりとか、エロフィギュアが飾られてたりとか、アニメキャラの抱き枕とか」
「・・・どんな想像してたんですか」
「美沙さん、だっけ？が遊びに来たりするとか？」
「小５の頃に来たのが最後です、たぶん」
実は、先週片付けたのは、美沙と美沙の母親が来るというので、念のため、と母親に無理矢理片付けさせられたりしたわけだが。美沙のお母さんは今でも、俺の事を将来の旦那さま、とか呼んでいる。いやありえないのだが。
その時も結局、美沙はリビングに入っただけで、俺の部屋までは来なかった。
ポスターもその時に剥がしました。ごめんなさいセンパイ。
「Ｗｉｉもないね」
「ゲームはリビングで、という方針なんです。やりすぎないように」
「いいお母さんだね」
「放ったらかしにされてますがね。まあ、そのお陰でセンパイに来てもらえたわけですが」

「うん・・・」
女神は下を向いて少し黙り込む。
「えーと、修学旅行ですよね。沖縄ですか。いいですね。泳げそうだし」
「あっちは冬以外、いつも泳げるらしいよ。それでも春は寒いみたいだけど」
「センパイの水着姿とか見れるんでしょうね。二年の先輩が羨ましいですよ」
「そ、そんなことないよ」
なんとなく、恥ずかしそうな女神様。
またひととき、沈黙が支配する。
「・・・お昼に言ったことなんだけど」
「・・・ええ」
「ちゃんとごめんなさい、って言いたかったの」
「ちゃんと伝わってますし、センパイが謝ることじゃありませんよ。男の性質、ってやつです」
「優しいねかのんくん。・・・で、そういう関係はその、なるつもりはないってことを言わなくちゃ、って」
「それも伝わってます」
一口、自分で入れた紅茶を飲む。女神もストローの袋を開けて、そっと口に運ぶ。
・・・一瞬、あとであのストロー残しとこうとか邪心を抱いた俺はやっぱりバカだ。
「誤解しないで欲しいの。かのんくんのことが嫌いとか、そういう意味じゃないの。男の子として見れない、とか、そんなのでもない。かのんくんとお話しするのはとても楽しいし、その」
「はい」
「その、言っちゃダメなんだけど、今度一緒にモンハンフェスタ行こうって誘った時も、デートみたいな感じだなあってとっても嬉しかったし」

「男嫌いって噂を聞いたこともありましたけど、違うんですね」
「うん、本当は普通の恋愛とかもいいなあーって思うし、友達のデートの話とか聞くととても羨ましい。でも、ダメなの」
「何がです？」
「私は、かのんくんにふさわしいような女じゃないの」
「・・・それは、センパイが決めることじゃない気がしますが」
「でも、本当なの。・・・本当の事を知ったら、かのんくんも引くと思う。絶対に。もう、口もききたくないとか思うだろうし」
「そんなことは絶対ないです」
「ううん、間違いなく。私は、そんなふうに思われるのが嫌で、なるべく人と深く付き合うのはダメだって自分に言い聞かせてきた。本当の私を知ってしまったら、友達も、学校の人も、生徒会の人達もみんな私のことをそういう目で見て来るって。それが怖かったの。だから」
「誰ともつきあわなかった？」
「そう。こんな汚れた私は、もう人と触れ合う資格もない、そうずっと言い聞かせてきたから」
女神は俯きながら、話を続ける。
「・・・かのんくん、もし嫌じゃなかったら」
「何も嫌じゃないですよ」
「昨日みたいに、ぎゅってしてくれるかな。・・・違うね。ちゃんと言うよ。教官、ぎゅってしてください。背中を、ぎゅうっ、て」
俺は女神の手を取った。女神は立ち上がって、促されるようにベッドの淵に座った。その後ろに回り、その細い背中を見つめる。
「あの、最初に断っておきますが」
「何でしょう？教官」
「かのんくん、でいいです。・・・あの、その、男としていいますが、生理現象というか、どうしても出っ張っちゃうモノがあるっていうか」
ぷっ、と女神は吹き出す。

「大丈夫、ちゃんと分かってますよ。かのんくん。気にしなくていいです」
「じゃ、遠慮なく」
俺はベッドの上に座り、女神の両肩を背後から抱きしめた。
もう二度とない機会かもしれないし、と鼻先を女神の右耳の後ろのうなじに差し込む。とてもいい香りがした。
「ああ・・・この感じ・・・あったかい・・・」
すぐ近くで、女神の吐息が聞こえる。
すでに股間にあるモノは自己主張を始めていて、ちょっと焦る。でも気にしないと言っていたし、どうせなら、と柔らかなお尻にぴったりと当てた。途端に暴発の不穏な気配がして、慌てて他に注意をそらす。
「かのんくん、これから話すこと、誰にも話さない、と約束してくれますか？」
「ええ、もちろんです」
「家族にも、ですよ？」
「当然です」
「美沙さんにも、ですよ？」
「最初から話すつもりもありません」
「もし将来誰かと結婚しても、黙っておいてくれますか？」
「お墓まで持って入ります」
「あはは。本当に優しいんですね。ありがとう」
女神は少し、目頭を拭った。
「これから話すことは、とっても嫌なことです。私のことを嫌いになるだろうし、軽蔑するだろうし、今はぎゅってしてくれているけれど、嫌になって放してしまっても構いません。全て私のせいですから」
「もう、一生ぎゅってしていたいです」
「私はとても弱くて、臆病で、卑怯な女です。かのんくんの顔を見ながら話せないから、ぎゅってしてもらわないと、話もできないか

ら」
「こんなのでよければ、いつだってどうぞ」
「ちょっと支離滅裂になったり、泣いちゃったりするかもしれませんし、お聞き苦しいところもあるでしょうが、ごめんなさいね。あらかじめ」
「大丈夫です」
「では、家族以外には世界で初めて、かのんくんにだけ聞いてもらいます。学校の人はみんな私のことを女神とか呼んでくれるけれど、私がどれだけ汚れた、ひどい女であるか、を・・・」

それから2時間、時刻が23時を回るまで、女神はゆっくりと話をした。
それは、彼女がまだ芸能界にいる頃の話。
小さい頃からモデル学校に行き、ようやく雑誌に載るようになるまでの苦労、母親の狂気じみた芸能界への熱望、トップの座を巡る、子供ながらの嫌がらせ、先輩からの圧力。
そして、性的搾取。
途中から、女神はティッシュで目を拭いながら、話し続けた。
「・・・お母さんは、私の仕事がうまくいくととっても喜んでくれて、それを励みに頑張ってた。楽しいこともたくさんあったし。有名な人に会えたりして、私も舞い上がってた。でも、ある時から、それが始まったの。怖かった。とても」
見知らぬ男と二人にされ、これも仕事だから、と二人で風呂に入れられる。いろいろなところをいたずらされる。そして、
「・・・だからって、もう、どうせ綺麗な身体じゃないんだからって、何度も・・・相手をさせられて、すっごく痛くて、その仕事をさせられた日は毎晩泣いたの。・・・口の中に、舐めろとか咥えろとか言われて」

途中から、涙声でうまく話せない。
「生理が来てないからって中に出されて、マネージャーさんがあとで拭いてくれたけど、食べ物も喉を通らなかったの。何かを口に入れるとそのことを思い出して、無理矢理食べなさいって言われたけど、食べてはトイレで嘔吐して、また食べて、吐いて・・・」
女神の独白は続く。
「とうとう収録の後で倒れちゃって、それで一度お家に帰ったの。それで、お父さんとお姉ちゃんが一体どうしたの、って聞いてくれて、やっとお話が出来て・・・」
父親は、全てを母親に任せて安心し切っていた。それまで一切怒ったことのなかった穏やかな父親はその場で激昂し、母親を何度も殴りつけたのだという。
「お父さんとお姉ちゃんは、私がそんなことさせられてるのを知らなくて、もうこれからそんなことは絶対にさせないって・・・事務書の人に電話して、病気で引退する、ってことになったの。お母さんも、私が入院している間にベッドのところについてくれて、ずっと謝ってくれた。ううん、お母さんのことは恨んでないの。お母さんは私のことを思ってやってくれてたんだし、なんであんなことを承知してしまったのか、今では本当に馬鹿な親だった、て今も言ってくれてる。でも、」
ひと呼吸置く。
「でも、ね、その時に何度かそういう事があって、病院で検査したら、病気に、えっと、せ、性病にかかってる、て診断されたの。卵管が細くなってしまって、もう治らないそう。今後も妊娠しにくい身体になる可能性が高いです、とお医者様は言ってた。お父さんも、お母さんも、その時は中学生だったお姉ちゃんも、みんな一緒に泣いたの」
・・・それはそうだろうな。まだ小学生の女の子の将来を奪ってしまったのだから。
「それからは、もう一切を辞めて、この埼玉の小学校へ転校した。

最初はうまく話せないこともあったけど、まわりの友達もみんないい人ばっかりで、だんだんと辛い記憶は無くなっていった。でも、私は男の人が怖かった。今でもまだ、お父さん以外の人はちょっと怖い。それとは別に、周りの男の子も怖かった。小学生の頃はまだそうでもなかったけど、中学になり、高校生になって、みんなが噂するようになったの。あいつ、絶対処女じゃないぞーって。芸能界だからさ、やりまくりだったんじゃね？とかそんな風に。全部当たってたし、それを知られるのが怖かった。もし誰かを好きになったとしても、私はこんなに汚れた身体になってる。それを知って、その人に軽蔑されたり、落胆させてしまうのが怖かった。もしかして、優しい人ならそれでもいいよ、そんなふうに言ってくれる人がいるかもしれない、でも、学校の人に言いふらされちゃうかもしれない。ある日、学校にいくとみんなが本当の私を知ってしまって、男の子も、女の子の友達もみんなが軽蔑の眼差しで私のことを見る、そんな夢を何度も見た。だから決めたの、もう私は誰かを好きになる資格はない、誰かに愛される資格もない、もし許してくれる人がいたとしても、それは結果的にその人を穢すことになるんだって」

「・・・・」

「だから、私はずっと一人でこれからも生きていくつもりだった。お父さん、お母さん、お姉ちゃんがいてくれて、守ってくれるあの家で。高校を出たらあの家にひっそりと暮らして、優しいおばあちゃんのお世話をしようって。おばあちゃんは知らないの、こんな私の本当の姿を。だから今でも優しくしてくれる。おばあちゃんが知ったら、きっと可哀想な子、って思ってくれるけど、やっぱり汚れた自分を知られるのは嫌だったの。友達も、親友も、誰にもこんな事話せなかった。・・・ごめんなさい」

最後のは、鼻声になったことの謝罪だ。

「でも、でもね、昨日かのんくんにあっためてもらって、すごく嬉しかったの。ああ、やっぱり人と触れ合うのって楽しいし、温かいし、なんていうか、溶かされちゃうなあーって。でもね、お姉ちゃ

んにあのあと言われたの、本当の事を隠している間に、相手の人に誤解を与えちゃって、それが深まれば深まるほど、後々その人を苦しめる事になるからって。優しい男の子はきっと、そんなのいいよ、僕が許してあげるからって、そう言うかもしれない。でも、それはきっとその人を将来を奪ってしまう。・・・いつか、性病にかかったような女と一緒にいる事を・・・後悔する、こど、子供も産めないような女であることが重荷になる時がやって来る、それはもう分かっていた・・・こと。かのんくんに言わなくてもいいけど、これ以上のおつき合い、は、出来ない、ってこと、を、ちゃんと、伝え、て、きなさい、って」

最後はもう、言葉になってない。

抱きしめた腕の中で、彼女は本気で泣き始めた。もう、これ以上話すのは無理だろう。

徐々に振り出した雨が本降りになり、長い夜の雨のように続く。軒下で待っている人には、永遠に終わらない時のように感じるような雨。それもやがて、徐々に、徐々に小さなものになっていく。

女神は何度も涙を拭った。最後に、沈黙の時が支配する。

「・・・ああ、言いたいこと、全部言えてすっきりしちゃった。もう、本当に嫌な女で、我ながら嫌になっちゃうよ」

「・・・あの、センパイ」

「正直ね、こんな私でも、なんて思っちゃう事がたまにあるの。でも、どうしても最後には言えないってことがずっと続いてた。あはは。なんでかのんくんには言えちゃったんだろうね」

「センパイ、あの」

「こんな私だけど、誰かの役に立つんだたら、そう思ったりするの。だから、昨日かのんくんがぎゅってしてくれた時、もう本当の事は全部黙ってて、かのんくんがアレだったら、その、もしそういうことがしたかったら、そのままされちゃってもいいかなっとか思ったりしちゃった。かのんくんは私が初めてじゃなくてガッカリするかもしれないけど、少なくとも血まみれになっちゃったりはしないし、

痛がらないかもしれないし」
「センパイ、ちょっと話を」
「でね、こう言うの。『かのんくん、犯罪だよ？でも警察には言わないから、この事は二人だけの秘密だよ、絶対にね』かのんくんなら、なんとなく信用できる気がしちゃったから。でもだめだよね。こんな病気持ちの汚い女なんて。かのんくんが汚れちゃう」
「・・・あの、僕は一体どういう目でセンパイに」
「あーーーすっきりしちゃった！」
パッ、と音を立てて女神は立ち上がった。ベッドサイドに立ち、うーん、と大きく伸びをする。
「本当にすっきりです。あのねかのんくん、僕なら気にしませんよ、受け止めてあげますよ、とかそういうの禁止。絶対にダメですよ？認めませんから。高校一年生がそんな事言っても私は認めませんからね？」
「いやあの、センパイ、だから」
「かのんくんに望むことは、明後日の日曜日に一緒にモンハンフェスタに行ってくれること、ペアで優勝してくれること、です。それ以外は全部お断り、です」
くるりとこちらを振り返る。眼はウサギのように真っ赤だが、表情は晴れ晴れとして気持ちのいい笑顔だ。
「・・・立候補もできませんか」
「できません。あなたの限りない将来は、もっといい女性に出逢うためにあるのです。美沙さんか、他の誰かこっそり好きな人か、少なくとも私の席はかのんくんの隣にないことは確かなのです」
「断言されても」
「さあ、これで言いたいことは全部言えました。あとは日曜日、よろしくお願いしますね、Ｃａｎｏｎ教官！」
ガチャリ、と玄関から音が聞こえた。
「ただいまー。なおき帰ってるの？・・・あら？」
そうか、女神のリーガルが玄関に置きっぱなしだ。

「お帰り母さん。あの、ちょっとお客さん」
「あらら、こんな時間に？もしかしてこの靴、女の子かしら？もしかして、ひょっとして」
「ちゃんと出ていくよ」
慌ててベッドから起き上がると、出て行こうとした女神に先んじて部屋を出る。やや散らかったリビングでは、エコバッグを下げた母親が突っ立っていた。
「あら、ちゃんと服着てたのね直樹。お母さんちょっと逃げ出さなきゃなんないかと思ってたわ。・・・あら？」
「夜分遅くにお邪魔しております、お母様。わたくし、生徒会役員の姫神、と申します。こんな時間までお邪魔をしてしまいまして、本当に申し訳ございません」
母親の目が大きく見開かれる。そりゃ、こんだけの美少女が息子の部屋から出てきたら何かの冗談だと思うだろうな。
「あららまあ、お人形さんみたいに可愛い子ね！ひょっとして美沙ちゃんじゃない子だったら、と思って名前呼ばなくて良かったわ！今晩は、ええと姫神さん。ご丁寧にありがとう」
「なまえ言ってるじゃねーかよ！だいたいなんで、いつもみんな美沙なんだ」
「やっぱり美沙さんが第一候補なんですね。今宮君はいつも否定するけれど」
「センパイ、だから、美沙は」
「あらら、ごめんなさいね姫神さん。ひょっとして、うちの子のことを気にいってくれてたりとか？」
「いえ、とんでもありません。そんな事を言ったらたくさんの女の子が泣いちゃいます。今日は生徒会の打ち合わせが長引いてしまいまして、先程まで他の役員さんもお邪魔させていただいていたのですが、私だけ帰りそびれてしまいまして」
「・・・んなわけない」
「まあまあ、お世辞までお上手で。うちのバカ息子が不始末をしで

かさなかったか、母親としてはとても心配ですわ。こんなのと二人っきりで、何かされなかったかしら？」
「やけに信用のない息子だな、オイ」
「いえ、今宮君は本当に紳士ですから。とても話が楽しくて、ついつい長居してしまいました。では、遅い時間でもありますのでこれでおいとまさせて頂きます。本当に遅くまで申し訳ありませんでした」
「何もお構いもせず、こちらこそ恐縮だわ。今度また是非、日曜日にでもいらして下さいね。私は平日あまりいませんので、こんなバカ息子で良かったら毎日でも自分の家だと思って来てあげて下さいね。ああでも、もし身の危険を感じるようならいつでも携帯に」
「出さなくていい！」
「まあ、母親としてはあんたが不埒な行為に及ばないかが心配でならないわ。直樹、ちゃんと家までお送りしなさい」
「わーってる」
「それでは、お休みなさい、お母様」

「素敵なお母様ね」
彼女の家の付近まで来てから、なんとなく二人乗りをやめて、チャリを押して歩く。左手は、俺の右手の掴んだままだ。
「ミーハーなんですよ。いい歳になって」
「とっても息子さん思いなのね。毎日が楽しそう」
「普段はもっと遅いこともあるし、顔合わさないことも多いんですよ」
「そうなの？あんなに楽しいお母様なのに」
女神はもうすっかり泣いた跡も消えて、普段通りの美しい瞳で夜空を見上げている。
「もう、真夜中だね・・・」

「怒られますよね、さすがに」
「お姉ちゃんに、勝手口から入れてもらう。今日はパ・・・お父さんも早く寝ちゃったみたいで、私も9時頃帰って来たってことになる予定だし」
「明日は休みですからね」
「うん。しっかり朝寝坊しちゃう」
誰もいない夜道に、女神は右手のVサインを突き出した。
今日はなんだか、たくさんのことがあった気がする。剣道部、お昼の屋上での話、そしてさっきの話・・・
「センパイ、俺」
「あ、もうすぐそこだ。ありがとうねかのんくん。もうここで帰りなさい」
「センパイ、俺は」
門扉を少しだけ開き、女神は中に入っていく。俺の手を繋いだまま。
再び、頬に感じる柔らかい感触。
「・・・今はこれが、精一杯のありがとうなの」
今日のこれは夢じゃない。二度目は夢じゃない。
「日曜日のデート、来てくれる？それともう、会うのも嫌になっちゃった？」
「もちろん行きますよ」
「ありがとう。絶対、優勝しようね！送ってくれてありがとう。気をつけてね！」
そういうと、女神は暗闇に消えていった。

「日曜日、9時か・・・」
気だるい土曜日の朝、ベッドの上でゴロゴロしつつ、女神からもらったチケットを見つめる。
携帯メールの着信はゼロ。昨晩、ちゃんと家に着きましたメールへの返事はなかった。
アドレスを交換して以来、毎晩のようにメールが来ていたので、な

んとなく不安になった。家に帰ったら御両親がオニの形相で待ち構えていて、一晩中怒られてたりとか。
あんなに可愛い娘だ、心配してもし足りないだろう。ましてや、過去に色々と心配な事もあったことだし。
ひょっとして、誰か男といたのか、と拷問にかけたれていたりして。
そして、今頃俺の名前が割れ、学校に問い合わせが行き、お父さんは薙刀を持って俺の息の根を止めんと真っ直ぐ向かっているという可能性も。
次に来るメールが『今すぐ逃げて！』だったりして。
下らないことを考えつつ、ゆっくりと起き上がる。

「でもねえ、お母さんとしては、とっても幸せな気分を味わえたのよ」
母親は朝から、何度もこれを繰り返す。曰く、彼女居ない歴１５年間の息子にようやく春の気配がした、それもとびっきりの美少女が。
美沙ちゃんのママとの約束はあるけど、あんなかわいい子なら友情を天秤にかけちゃうわあ。
おいなんだその約束ってのは。聞いてないぞ。まあ、どうせロクでもないことに違いない。
「ねえ直樹、姫神さん、今度いつ来るの～？今週の日曜、母さん家にいないから、来るなら来週あたりに」
「こねーって。生徒会の用事で来ただけだって言っただろ」
「嘘つかないの。あんたに生徒会が何の用事があるのよ」
んぐ、と納豆を書き込む手を止める。
「いや、それは、修学旅行の行き先とか」
「なんで一年生の修学旅行に、二年生の人が関係あるわけ？」
「・・・生徒会としては、ちゃんと把握しておかなければ、とか言ってたし」
「生徒会の人、何人来てたの？」
味噌汁をずずずっ。今日はあわせ味噌か。悪くない。

「えーと、男の人が４人、女の人がふたり」
「コップ、二つしか使われなかったようだけど」
「・・・姫神さんしか、お茶出さなかったんだ。他の人、途中で飲み物買って来たもんで」
「ふうん。・・・部屋に落ちてた髪の毛、女性のもの一種類しかなかったけど」
「げほごほっ！」
「勝手に入るな&いつ調べた？って顔ね。あんたが送っていったすぐ後よ。すぐ片付けた、という言い訳は通用しないわ」
・・・忘れていた。この人は一応国立理系大学の出身で、大手薬剤メーカー開発部のチーフ。
愛読書はシャーロック・ホームズ全集。好きな人はシャーロック・ホームズ、尊敬する人はシャーロック・ホームズ。
「あと、玄関の」
「まだあんのかよ！」
「早く全部吐いた方が、楽になるわよ」
「・・・ごめんなさい」
「来たのは姫神さん一人、合ってるわね？」
「はい」
「姫神まりささん？」
「な！なんで・・・」
「とっても可愛らしい二年生の姫神さん、って聞いたら、美沙ちゃんのママがたっぷり教えてくれたわよ。有名人で元アイドル歌手だってね」
歌手、は違う。たぶん。
「まさか、美沙には」
「伝わってないわ。ちゃんと釘を刺しておいたから」
良かった。夜中に二人きりだったなどと高校全体で噂になれば、半殺しでは済まないかもしれん。
「姫神さん、なぜ泣いていたの？」

バレてたか。そりゃまあ。
「彼女の悩みの問題です。理由は一切口外しない、と約束しました」
「ベッドを使った形跡は一部しかないようだけど？」
「そういう行為には及んでおりません」
「カーペットの跡からして、最初はテーブル脇の床に座った。次にベッドに移動したが、枕には彼女の髪の毛は付着していない。ということは、ベッドの上に座って見つめあっていた、もしくは抱き合っていた。どう？」
「・・・あんた、本当の職業は何か言ってみろ」
「ダイア化学工業のしがない研究員サラリーマン。それがなにか？」
「捜査一課とかに協力してないか？」
コーヒーをずずっ、と啜る母。いつもながらブラックだ。
「してないわよ。いつ依頼が来るのかしら、と待ってはいるんだけど」
日本の警視庁よ、ちょっとはドラマとかアニメを参考にしろ。たぶんちょっとは役に立つぞ、この人。
「セックスおよびフェラチオはしていない。なぜならあんたのパンツには」
「わーっ！もうやめっ！ごめんなさいっ！許してくださいっ！」
「最初から諦めて、全て吐けば見逃してやるものを。・・・で、次のデートはいつ？」
「に、日曜、です」
「明日じゃない。ちゃんと勝負パンツ決めたの？」
「い、いいえ・・・」
「あんた、率直に言ってデートの経験は？美沙ちゃんと出かけたのを除く」
「ありません」
「約束時刻及び行き先の予定」
「東京ビッグサイト、午前9時に駅で待ち合わせ」
「掛かる時間と電車の料金、昼食の予定を述べよ」

「・・・わかりません」
「今すぐググってこい、この甲斐性なし。デートの主目的は？」
「モンハ・・・ゲームのイベントに」
「ふむ・・・色気ないわね。まあ、それについてはいいわ。・・・東京か。あとでお金、渡してあげるから」
「ありがとうございます、母上様」

結局、その日は一日中、女神からの連絡はなかった。
時折思い出したようにロックラックにログインしてみたが、ＪＪのログイン状況はいつもオフライン。
フレの中には同じく、明日フェスタに出るぞ～という人もいて、それなりに盛り上がっているらしい。
みんな上手いんだろうな、でも、普段から一緒にＳｋｙｐｅプレイしている自分たちも、連携度はかなり高いはず。そう思うしかなかった。
明日は決戦の日、日曜日。

ふたりでもんはん　下編（前書き）

ｐｉｘｉｖからの転載です。

高校の憧れの先輩、姫神万理沙、通称女神。
人生初のデートは、女神と出かけることになって・・・？

モンハンフェスタ当日、そしてその後の二人。

ふたりでもんはん　下編

続きです

「とまあ、こんな感じでした」
電車の中で彼女がケラケラと笑う。もちろん、性的なツッコミ部分は省略してある。
「本当に、楽しいお母様ね。私も推理小説大好きだから、ぜひ一緒にお話ししたいわ」
いや、そんな自慢できるような母親じゃないんですけど。頭をポリポリとかく。
「センパイみたいな才女に、ちゃんと釣り合うんですかね」
「あら、お母様のほうがよっぽど才女だわ。私のほうが釣り合うかどうか、心配しちゃう」
いつもと同じ、屈託の無い、いい笑顔だ。
どうやら、俺の抱いた懸念は杞憂であったらしい。彼女は家に着くや否や、姉に捕まっていろいろと白状させられ、そのまま倒れこむように寝入ったとか。そして気がついたのは夕食の時間、１８時。
「寝過ぎ、ですね」
あれだけ泣いたしなあ。疲れたんだろうな。
「かのんくんに連絡はしようと思ったんだよ。でも、いざ電話をかけようとすると、泣いちゃったこととか、いろいろと恥ずかしい自分を見せちゃったことを思い出して、メールしようかなーと思ったり、本文打ったのに送信できなかったり、また電話番号見つめたり、とか」
恋する女性みたいですね、とは言えなかった。そんなセリフ、あと１０年もしたら言えるようになるんだろうか。
「で、そうしてる間にお風呂よーとか呼ばれちゃったり、お風呂入って髪の毛乾かしてたらお姉ちゃんに呼ばれて、マリオのお手伝い

して、そして」
俺への電話はマリオブラザーズに負けた、と。さすが世界一売れたゲームだぜ。
「明日の服選んでたら、お姉ちゃんがもっといい服選びなさいって、ちょっと試着してたらいい服があったんだけど、その色に合う下着が無かったりして、服を選び直したら夏物のカーディガンがうまく合わなくって、で、もう12時になっちゃったの。もう、こんな時間じゃメールも悪いなあって」
いや・・・電車の中で下着の色、とか言いますか、副会長さん。
噂は聞いてたけど、しっかり者の反面、天然ボケも激しいって本当ですね。
下着の色が、とか男と喋っている可愛い女子高生を見て、反対側の窓際のお兄さんが凄い目で僕のことを睨んでおられますよ。たぶん何か誤解してる。
しかし、今着ている服は確かにとても可愛らしい。白をベースにした、水色、ピンク、黄色、赤などの花柄ワンピース。薄手のシースルーな夏用カーディガンを羽織り、左腕には銀色のブレスレットが嵌められている。いつもは右側をひと束たばねているトレードマークの髪飾りはなく、漆黒の髪が自然に背中へ流れていて、小さな頭の上には真っ白なベレー帽がちょこんと載せられている。普段見かけない、控えめなイヤリングも小顔を余計に際立たせている。
元々の顔とあいまって、このまま雑誌の表紙にでもでられそうな雰囲気。原宿あたりを歩けば、怪しげなカメラマンにモデルにどう？とか勧誘されること請け合いだ。
「お母様、お怒りじゃなかったかしら？あんなに夜遅くまで、ご自宅にお邪魔しててしまって」
「先程の会話の通り、なんか喜んでたみたいですよ。あの人、娘が欲しかったんです。美沙のことを昔からネコかわいがりしているのもそのためで」
「美沙さん、本当に愛されてるのね。付き合っちゃえ、って話はな

かったの？」
「小学校の頃、いろいろと囃し立てられて、それで絶交することになったんです。それ以来、ずっと仲悪いまま、学校だけはずっと一緒に来ちゃって。美沙のお母さんは逆に男の子が欲しかったとかで、いっつもあんな風に言うんです。本人同士は仲悪いのに」
「ちらっと見ただけだったけど、そんな感じでもなかったけど？」
「それにあいつ、彼氏いますし。今は」
「えっ、そうなの？」
「ええ。同級生のタカシって奴と。あ、これ秘密ですから。なんか、誰にも内緒ってことみたいで」
「そうなの。じゃあ、まだ私にもチャンス、あるわね」
「え？」
間もなく国際展示場、というアナウンスが響いて、電車は駅に滑るように入っていった。

「えー、こちらが参加受付です。当日参加の方は、二人一組、ふたりひとくみになって受付を行ってください。繰り返します、お一人での参加はできません、必ず二人一組に・・・」
拡声器でアナウンスを流すお兄さんを尻目に、受付を済ませた俺たちは様々なブースを巡って回った。結構混んでいて、大きな会場も人でいっぱいだ。アイルー村、というブースでは、『お役立ち』兼たまに『お邪魔』になるネコモンスター、アイルーのぬいぐるみなんかが展示されている。いいなあ、あれ、と女神はやや真剣に見つめている。その隣では朝からいい匂いがして、ポポノタンの蒸し焼き、という名前の何か得体の知れない肉がくるくると回りながら焼かれている。
その隣では・・・
「そこのカップルのお姉さん！お兄さん！次、どうですか！」
大きな声が聞こえて、観衆が一部振り向く。メガホンのメガネお兄さんがこちらを向いている。え？誰？カップル？

「そこのあなた！そう、あなたですよカッコイイお兄さん！是非いっちょ、彼女にカッコ良いところを見せましょう！」
お兄さんは、コンビニなんかで見かけるカラーボールのもっと赤いようなものを持って大声を張り上げている。あれは何だ？
「へーえ、ペイントボール投げだって！かのんくん、いこー！」
女神はパッと顔を輝かせて、そのイベントブースへずんずんと俺を引っ張って行く。ここで気づいたが、俺の左腕を女神ががっちりとつかんでいる。そりゃ、カップルに見える訳だ。
待て、左腕の背中側にあるこの感触は、まさか・・・
「さーて、新しい挑戦者です！落伍者続出のこのペイントボール投げ、見事パーフェクトの方にはこの愛らしいアイルーぬいぐるみをどどーんとプレゼント！さあ、みなさんどうぞご参加ください！」
すでに挑戦した人は少なからずいるようだが、まだパーフェクトはでてないらしい、今の言い方では。
・・・ていうか、有料かよ。
「さあ、挑戦者は背の高い、ひょろっとしてるようで結構がっしり系のお兄さん。その鋭い眼差しで、見事本日最初のパーフェクトを勝ち取るか！ペイントボールは合計7発、見事命中するでしょうか！」
あまりちゃんとした説明なく、ゲームが開始される。手元には7個のペイントボール、やや遠くの方にはストラックアウトっぽい、動く画面に何匹かのモンスター。
「せいっ！せいっ！せいっ！！」
「おお、すごい！お兄さん、次々と的に命中していきます！チャナガプル、ドスバギィ、メラルー。そしてロアルドロス！おおっと、ここで5発目も命中！すごい！さて、あと2発です！」
なんとなく適当に投げているが、以外と当たる。一応中学校の頃は野球部兼ねてたし。
「ディアブロスにも命中、これはひょっとして・・・最後の難関、ラギアクルス来たあ！これは強敵だが・・・当たった！当たりまし

た！見事、パーフェクト達成！」
「やったあ！かのんくん、すごーい！」
観客の歓声と共に、女神からの祝福までいただく。ご褒美のハグつきで。残念ながらキッスは頂けなかったが。
「素晴らしい！みなさーん、パーフェクトの方が出ましたよ！無料ゲーじゃない、無料ゲーじゃないことを見事証明してくれました！さあお兄さん、本日最初の栄冠と言うことで、どうぞお立ち台へ！」
「え、えーと」
「はい、まずはお名前と年齢を」
「えっと、かのん、高校生です」
「かのんさん、見事でした。こういうの、お得意ですか？」
「いや、偶然です」
「謙遜もお見事です。もしかして、野球部とかでしょうか？さてはどこかのエースピッチャー！？」
「いえ、剣道部です」
「全然ボール投げに関係ないじゃないですか！さては、夜のボール投げがお得意とか？」
お兄さんのマイクパフォーマンスに、観客が笑う。
「いえ、そっちも全然で」
「またまたご謙遜を！それにしても、とっても可愛い彼女さんをお連れですよね！いやーうらやましい！」
「いや、彼女とかじゃなくて」
「おや、違うんですか？もしかして、今日これから告白？だったら、このマイクで一発ここでやっちゃおう！」
「いやあの、その」
「おおっと、モンスターのペイントボールは得意でも、女の子のマーキングは不得意でしたかぁっ？」
なんかノリノリになっているメガネお兄さん。なんか注目されていて、頭がうまく回らない。
女神はといえば、こちらはなんだかとっても嬉しそうに下から見上

げてくれている。
「じゃあ、今はお友だち、ということですね？」
「いや、えーっと、その」
「友達でも彼女でもなく？」
「ハンター仲間、です」
「素晴らしい！みなさん、こちらの超可愛い彼女さんもハンターだそうですよ！ロックラックにはまだ美少女が一杯！いやー、そう思えば、課金も全然苦になりませんよね！」
ここでまた笑いが。
「さて、見事パーフェクトのカノンさんには、彼女さんに負けないくらい可愛いアイルーぬいぐるみをプレゼントです！これで彼女のハートもシビレ罠にかかったリオレイア同然！さあ、あとは捕獲玉を投げるだけですよね！お見事でした！さて、次の挑戦者は～」
やっとのことでお立ち台から解放され、スタッフの女性からぬいぐるみを受け取る。意外と大きくてかさばる感じだ。
「やったあ！かのんくんすごい！超かっこいい！」
「いやまあ、本当に偶然ですし」
「それでもすごいよ！もう、今ならイチロービームにだって勝てちゃう感じ！」
そういうキャラでしたっけ、女神様。
「では、プレゼントです。どうぞ」
「ええっ、いいの？せっかくのおみやげだよ？」
「あの殺風景な部屋に飾れ、と？」
男の部屋に、ビニールのママ埃をかぶったアイルーいっぴき。
「うう・・・似合わない・・・」
「ヤフオクかな・・・」
「そんなの、ダメダメ！もったいないよ！」
「というわけで、どうぞ」
「じゃあ・・・ありがとうかのんくん。もう永久保存、一生大事にしちゃうよ！」

「本当ですか？５０年後に会いに行きますよ？あの時のアイルーぬいぐるみはどこだーって」
「うんうん！来て来て！絶対に見せちゃうから！」
よく分からない漫才をかましたまま、他のブースをまたまたうろつく。大会予選は１１時からなので、もう少し余裕がある。
「カノジョ、かあ・・・」
女神は先程のＭＣに、ちょっと影響を受けたみたいだ。
「学校の奴らがいたら発狂しますよ。いや、もしかしているかも。月曜日に磔にされますね、俺」
ノリで軽口を叩く。
が、なんとなく反応の薄い女神。
「ねえ、かのんくん、あんなこと言っちゃって、私といるの嫌にならない？」
「全然。とても楽しいです」
「なんか、一日考え込んじゃった。言わなかったほうが良かったのかなあとか、正直ヤな女だなあとかって」
一歩前に進んでしまった女神の背中を見つめる。折れてしまいそうな、華奢な背中を。
「俺、なんも気にしてないですよ。本当に」
「うん、そう言ってくれると思った、かのんくんなら。でもさ、やっぱり・・・」
あれれ？一晩前の女神に戻っちゃったか？
「って、くよくよすんなよっ！」
自分でツッコミを入れ、右手のこぶしでベレー帽をちょこん、と叩く。
「さあ、鬱陶しい女はここでおしまい！そろそろ予選の開始、かな？」
「まだもうちょっとありますよ。あれだったら」
まだ早いかな。でも、女性は混むからなあ。
「あと２０分くらいありますが、トイレとか済ませておきますか？」

「かのんくん、本当に彼女いない？そういう気遣いとか、初デートの男のコには絶対無理だと思うんだけど」
「脳内デートなら、もう何回も済ませてますんで」
「あはは。嘘っぽーい」
本当は美沙の影響ですごめんなさい。
「女性はあちらですね。３７番ブースの当たりで遊んでますんで」
「うん、じゃあ、また後で」

「それでは、予選を始めます！予選に参加される方は、正面モニター両脇にお集まりください。繰り返します、今から予選を・・・」
大型モニターには、１１時から予選が始まります、と大きな字で表示されている。その両脇にはそれなりに大きな液晶テレビが据え付けられていて、Ｗｉｉが２台置かれている。
予選のルールは先程説明を受けた。予選は２段階、二人一組でモンスターを討伐する。最初はボルボロス、次がラギアクルス。
「いよいよ、だね・・・」
女神の顔色はやや冴えない。緊張しているんだろうか。
「ええ。武器はボロスが片手、ハンマー、大剣、ガンみたいですね。２戦して１０分以内の討伐が出ればラギアに行けるようです。ラギアが片手、太刀、ランス、ガン。ラギアをクリア出来たら本予選に行けるる、と」
ちなみに、本予選はまさにチーム戦で、トーナメント方式で討伐時間を競いながら勝ち上がって行く。最終予選、北海道、東北、中部、関西、九州予選の覇者と対決できるのはたったの２チームだ。
「がんばろうね。・・・かのんくんは武器、どうする？」
「ボロスは片手とハンマーの組み合わせがいいでしょうね。センパイが」
「ここではＪＪだよ」
「はい。ＪＪはハンマーですよね？」

「うん、どっちかって言うと、片手とハンマーならハンマーかな」
「じゃあ、僕が片手剣で。ラギアはＪＪが太刀、ですか？」
「うん。でないと倒せない」
「するとランスはかみ合わないから、片手か太刀、でしょうか。うーん、サポガンでもいけそうですが」
「かのんくんの邪魔しないようにしないとね」
「もう、積極攻撃あるのみです。１０分以内のクリアは結構厳しい条件ですから。・・・と言いたいところですが、とにかく被弾すると時間がかかりますんで、なるべくうまくかわしつつ、というところでしょうか」
「はい、了解しました教官どの」
「では、いざ参りましょう、ＪＪ」
「よろしくお願いします！」

「はい、ではえーっと、次のチームの方～。お名前を」
「Ｊ＆ａｍｐ；Ｃチーム、です」
「えーと、Ｊ＆ａｍｐ；Ｃさん、と・・・・。はいはいありました。準備はいいですか？どちらもクラコン、でしたね？」
「はい」
「では、２回勝負で見事、ボルボロスを討伐して下さい。各武器の選択およびアイテムの確認時間は９０秒です」
「はい」
「では、武器選択画面に移って下さい」
テレビの前は小さな囲いがあって、そこに椅子が二脚並んでいる。しかし囲いは小さくて、すぐ背後から観客がのぞき込んでいる形だ。主催者側も、これは承知の上なのだろう。だがなんだか落ち着かない。
いざ椅子に座ると、後ろのギャラリーの声もあいまって緊張してきた。コントローラは変にべとついていて、触りごこちが悪い。ふと隣を見ると、ベレー帽の下には真っ白な顔。

「ＪＪ、大丈夫ですよ。普段どおりやれば、なんてことありません」
「は、はい。うん、大丈夫」
カチャカチャと画面を確認し、アイテムも確認。念のため、横目でＪＪの装備とスキル、アイテムも確認する。
「選びましたか？では・・・スタート！」
さあ、戦いはここからだ。

「うう、ごめんなさい、かのんくん・・・本当に」
「気にしなくていいです。ああいうのって運もありますから」
「優勝とか言っといて・・・かのんくん、別の人と出てたら優勝かもしれないのに」
「ＪＪと出たいんですよ」
「うううう・・・もう、あたしだめだ・・・」
１戦目、開始早々に回復薬を飲み出すＪＪ。観客から失笑が漏れる。おいおい、まだダメージゼロだろ（笑）。
慌てて闘技場に飛び出すＪＪ。遮二無二突撃して行き、ボルボロスの突進にまともに吹っ飛ばされる。背後の観客から、また失笑の声。２回目の突進にまた吹っ飛ばされ、あえなく死亡。スタート地点に戻されてしまう。二人で合計４回まで死んでも大丈夫なので、すぐこれで終了ではない。
が、その後もＪＪは本来の動きではなく、何もない場所にハンマーを振り下ろしたり、攻撃中のＣａｎｏｎを吹っ飛ばしたり、まるで初心者の動きだった。討伐時間、２８分。
ドラクエのスライムよりも青くなった女神は、ガッチリと固まっている。緊張しすぎているんだろうか。
そういえば、トイレに行く前、ちょっとおかしかったからな・・・
「ＪＪさん」
そっと手に触れる。
「もう一度最初からできますよ。これ、２戦して１回でも１０分出ればいいんですから」

「う、うん」
「開始時のドリンクはいいんで、開始即溜め始めて、ボロスの左側、向かって右に動いて下さい。あとは突撃を避けて、麻痺ったら縦3、のいつもの流れでいいです。落とし穴に落ちたら爆弾を。いいですね？」
「は、はい」
「じゃあ、次行きましょう。大丈夫、落ち着いて」
「準備はいいですか？ではＪ＆ａｍｐ；Ｃチームの２戦目、スタートです！」

「２戦目で突破できたんですから、いいじゃないですか。結果オーライです」
「でもでも、９分ギリギリだったよ？」
「次に進めればそれでいいんですから。何も問題なしです」
「でも、でもでも、次はラギアなんだよ？しかも水中限定だし・・・」
半ばベソをかく女神。そう、彼女は元々水中戦が苦手なのだ。以前から。
「今度は、自分はガンで行きます。さっきちょっと見たら、火炎弾もあるようだったし、サポガンでもダメガンでもどっちでもいけそうなんで」
「うん・・・わたし、もう何もしないほうがいいかも・・・」
「それじゃ、さすがに討伐できませんよ（笑）」
「でもさ・・・でも・・・」
「いつもの、強気の生徒会副会長はどこへ行ったんです？美術部の備品を勝手に捨てた職員室へ乗り込んだり、ワンゲル部の部室を倉庫にしてた野球部に怒鳴り込んだり、合同練習っていいながら水泳部乗っ取ったＮ高の校長に話つけに行ったり、たった３ヶ月で無敵の生徒会副会長、と呼ばれたのはセンパイじゃないですか」
「ううう・・・でも今は、かのんくんに迷惑をかけたくない、一人

のＪＪなの・・・」
「迷惑なんて思ってません。ここに来れたのもＪＪのお陰なんですから、楽しんでやりましょうよ。別に勝てなくてもいいじゃないですか」
俺は、誰もがなし得なかった最強の女神とデートしているんだから。勝ち負けじゃなく、楽しんで欲しいな。
「うん・・・分かってる、んだけど、うん・・・」
「では、二次予選を開始しまーす！一時予選を勝ち抜いたチームは、もう一度正面モニターの脇にお戻りくださーい！」
マイクの音が響く。
「さあ、いつも通り、のつもりで行きましょう」
「そうだね・・・がんばろ！」

だーめだこりゃ、という嘲笑の声。１戦目終了、討伐時間２３分。ＪＪこと隣の女神は、もはや声を出す元気もなく、クラコンを持ったまま床を見つめている。
方針は悪くなかった。最初の咆哮をガード、ＪＪは回避・・・し損ねたが、すぐ立ち直って頭に攻撃。麻痺弾を打ち込み、麻痺したところで回転斬り。
しかし、ガンナーのＣａｎｏｎに攻撃が当たってしまい、火炎弾乱射の最中に吹っ飛ぶＣａｎｏｎ。尻尾に吹っ飛ばされるＪＪ。
何かおかしい。こんなの、普段のＪＪでもあり得ない。そう、家でモンハンしている時のＪＪはもっと活き活きと動いていた。まだお互いの素性も知らない時、Ｓｋｙｐｅを繋いだばかりの時、女の子だと知って驚きつつも、どうせ中学生だろうと思って命令ばかりしていたあの頃のＪＪと。
何か、何かが狂っている。それはお互いを知ったことからか。センパイと知って、憧れの女神と知ってしまったからか。もちろん、そうと知った時は自分の強運に感謝したし、Ｓｋｙｐｅごしにでも会

話できることがとても嬉しかった。でも、違う。なんだろう。
そう、自分は女神と、姫神万理沙と知ったから一緒に出場したわけじゃない。大人びた、頼れる生徒会副会長とコンビを組んだわけでもない。心に傷を秘めた、傷つきやすい少女とコンビを組んだわけでもない。
ＪＪと、だ。
誰よりも下手で、男口調で、強がりばかり言っている、あのＪＪだ。Ｓｋｙｐｅごしに分からないところ、だめなプレイを諌めて直して、そうやってやっとこさ一人前になってきた、あのＪＪと出場したはずだ。そうだろ、Ｃａｎｏｎ。
「ＪＪ、２戦目行くぞ。準備はしろ」
自分でも自覚することなく、口調が変わってしまう。
「かのん、くん？」
「準備だ！いいか、お前は太刀だ。まずこんがり肉、すぐに闘技場へ直行。一発目の咆哮は回避しろ」
「は、はい、教官」
「すぐに爆弾を頭に設置。起爆は俺がやる。あとは開始１０秒で麻痺させるから、それまで抜刀、移動切り、すぐ回避。できるな？」
「はい！」
「一回目のダウン直前に指示する。シビレ罠の準備をしておけ。ダウンしたらすぐ罠設置、あとは赤ゲージ維持。それまでは黄色を維持！」
「了解！」
「では行くぞ！」

「やった！やったよ！教官！すごい、さすがです！」
「すみません、なんだか突然あんな口調に」
「ううん、なんだか急に、昔のＣａｎｏｎ教官が帰って来た気がして、とっても心強かったです。もう、指が勝手に動いてました。もう、爆弾も罠も教官の言う通りにやってたら、あっと言う間に討伐

完了！の画面でした！」
「うう、センパイ、もう終わったんですから、元に戻しましょうよ・・・」
「いーえ、お昼から本予選です。それまでは、教官のままでお願いしますね？」
「うううう・・・お願いだから、誰にも聞かれていませんように・・・」
「さあ、お昼はビストロ・モガ行きましょう！お腹空いちゃいました！」

ゲームを忠実に再現した？というネコ飯ショップ「ビストロ・モガ」で、ネコのエプロンをしたウェイトレスさんに運ばれて来た得体の知れない食事を食べ、本予選の時間待ちにまたぶらぶらと歩く。本予選は１４時からなので、もう少し時間はある。
片手に大きなアイルーを抱いたまま、女神は俺の腕を掴んであちこちに引っ張って行く。顔には満面の笑み。もう、完全復活だ。
「さあ教官、あれはどうですか？何だかたくさん本が並んでますよ？」
「いやあれは・・・いわゆる同人誌ってやつで、中身は１５禁とか１８禁とかじゃ」
「そうですか。１５禁なら私は大丈夫ですね。教官はまだダメですよ、この私が許しません」
「・・・こんな時だけ、なぜ生徒会の人に」
「何か言いました？」
「いえ、何も。１５禁とかやめといたほうがいいですよ、お父さんに見つかったら何て言われるか」
「変ですねえ、教官は１５歳で見たことないはずなのに、なぜ中身が分かるんですか？」
「いや、それはその、一般常識として」

「あー、さてはえっちぃ本ですね。読んだことあるんですね？これは次に部屋に行った時、ガサ入れですねー」
本気でやめて下さい。あなたの写真集がたくさん出てきますから。
「じゃあ、こっちのショップの方がえっちな教官にはいいですね。Ｔシャツとか小物のお店みたいです」
「らぶらぶアイルーＴシャツ・・・なんでアイルーがこんなにミッキーさんしてるのやら」
「ど〇でもいっ〇ょに似てるから、とか？」
「さり気なく、爆弾発言ですね、それ」
こんなの着て、部活行けません。
「じゃあ、お揃いで買いましょう。私はＭサイズで、教官は背が高いからＬＬですか？」
「３Ｌです。・・・あの、本気で？」
「おじさん、このアイルーＴシャツ、お揃いで下さい！女性のＭサイズと、男性の３Ｌで！」
「あいよっ！綺麗なお嬢さん、ペアルックかね？お兄さん、羨ましいね～」
「いえいえ違うんですおじさん、私の片想いなんです！」
「なんと、こんな可愛いお嬢さんが片想いだって？罪作りなあんちゃんだねえ～」
もう、なんとでも言って下さい。
「あいよっ、４８００万円だ！」
高えなオイ。万を抜いても。
あーいや、彼女はお金持ちなんだった。貯金がたっぷりあるって話を聞いた事がある。
「べっぴんなお嬢さんにオマケしてもう一つ、この首振りアイルー人形もどどーんとプレゼントだ！もってけどろぼー！」
「わあっ、ありがとう、素敵なおじさん！愛してる！」
「わはははは！あんちゃんにふられたら、遠慮なくこのおじちゃんがもらってあげるよお嬢さん！また買いに来てな！」

「えへへ、大丈夫、死ぬまで追いかけちゃうんだから！またねーおじさん！」
Tシャツと、ネコの人形が入った袋を受け取る女神。もうね、何と言うか、ニッコニコ。
「持ちますよ。ぬいぐるみも」
「ダメよ、教官に渡したら、せっかくのぬいぐるみが帰って来ないかもしれないもん。絶対だめ」
・・・なんか、幼児化していませんか？姫神センパイ。
「でも、両手が塞がっちゃいますし、ポシェットもありますし」
「う、うー」
「じゃあ、紙袋だけでも」
「うん、じゃあ、お願いします」
「ぬいぐるみも、あとでちゃんと返しますよ」
「・・・本当に？他のヒトにあげちゃったりしませんか？」
「約束します」
「どっかに起き忘れた、とかダメですよ？」
「命に代えても、お守りします」

「さーて、皆様！いよいよ、街に待った本予選です・・・」
正面中央の巨大モニターに、マイクを持ったお兄さんの顔が映る。
「応募総数、全６８チームの中から、厳しい予選を勝ち上がったのは１６チーム！その中で、最終予選に行けるのはたったの２チームです！ここからはトーナメント方式で、２チームごとに対戦形式でタイムを競っていただきます！」
つまり、３勝したら本戦、全国大会である最終予選に上がれるということだ。いや、それ高校生とかで行けるのか。
もし大阪で決勝、とかだったら、二人で旅行に・・・ぐふっ、考えただけで鼻血が出そうだ。ていうか絶対無理だろそれ。
「なお、最終予選はここ、東京ビッグサイトで行われます！みなさーん、最終予選も、身に来て下さいねー！」

・・・なんだ、ここか。
ちょっとがっかりしちまった。
「さて・・・本予選第１戦目、お題を発表します・・・１戦目の敵モンスターは・・・」
観衆がシーン、と静まり返る。
「１戦目の敵モンスターは・・・クルペッコ！」
モニターに、緑色をした鳥モンスターがデカデカと映し出される。
キャキャキャキャー、というこのモンスター特有の声。
なんだよー、ペッコかよー、楽勝だな、とか言う声がちらほら。
いやしかし、これは・・・
「そう、歴戦のハンターの皆様にはもうお馴染み、というか楽勝とも言えるモンスターでしょう！だがしかし！だからこそ、タイムの圧縮は厳しいはず！いかに早く倒せるか、息のあった素晴らしいプレイの数々を期待しております！」
そう、大して強くないモンスターだからこそ、一つのミスが取り返しがつかない時間の無駄に繋がってしまう。
いつの間にか険しい顔つきになっていたのか、女神は俺の腕を両腕でぎゅっと抱きしめた。
「大丈夫だよ、教官。絶対勝てる。私たちなら」
「うん、もちろん」
「さあ、前へ行こう。Ｊ＆ａｍｐ；Ｃは、第３戦目のはずだから」
モニターに映し出された、開発者による模範プレイを見ながら、観客をかき分けて前に進んで行く。

「では、第３戦です！出場するのはｏｐｉｎｉｏｎチーム、社会人チームのようです。対するはＪ＆ａｍｐ；Ｃチーム、こちらはなんと、女性ハンターを含む、カップルチームです！」
なんとなくブーイングみたいなのが聴こえる気がする。
ちらりと隣のブースを見る。相手もこちらをちらちらと眺めていた。
黒縁の眼鏡をかけた、細い顔。歳２０半ばくらいだろうか。

「教官・・・ここからは、一発勝負ですね」
そう、本予選は全て一発勝負、二度目はない。
「ＪＪはハンマー、Ｃａｎｏｎは片手で行く。外に出たらすぐに爆弾を渡すから。ＪＪは強走飲んだらダッシュ、大タルＧを仕掛けて爆破。あとはひたすら溜めスタンプ。こっちは麻痺剣だから、手数で勝負する。落とし穴はいつでも仕掛けられるよう、準備しておけ」
「はい！教官！」
そこだけ大きな、女神の声。社会人が訝しそうにこちらを見る気配がする。気にしない気にしない。
「麻痺したら縦３に切り替えて。Ｃａｎｏｎに当てないように、ギリギリで頭を狙え。絶体に被弾はゼロ、
これは最低条件だ」
「了解！」
「では、行くぞ！」
「よろしくお願いします！」

開始して早々に強走薬を飲むＪＪ。Ｃａｎｏｎが蹴りを入れ、わずかな時間のロスもキャンセルする。
二人で闘技場の入り口へ猛ダッシュ、すぐに爆弾をＪＪに差し出す。
そこに待っているＪＪ。
「おおっと、これは素晴らしい！まさに息のあったプレイです、Ｊ＆ａｍｐ；Ｃチーム！」
本予選は実況入りだ。
鳥型モンスターへダッシュしていくＪＪ。鳥は咆哮態勢に入るが、すぐに小爆弾が起爆し、クルペッコは一旦止まる。
ザクザクと斬り始めるＣａｎｏｎ。数回斬り終え、コロリと回避。
そこにＪＪのハンマーが振り下ろされる。
「素晴らしい連？プレイです！お見事、Ｊ＆ａｍｐ；Ｃチーム！いやしかし、ｏｐｉｎｉｏｎチームも負けてはいない！二人でハンマー作戦！これはどういう結果を生むのか！」

あっちは二人ハンマーか。確かに攻撃力はある。だが。
「おおっと、ここで早くもＪ＆ａｍｐ；Ｃチームがペッコを麻痺！待っていたかのように、ハンマーが振り下ろされます！いやしかし、ｏｐｉｎｉｏｎチームも罠にペッコをうまく落とす！ハンマーの二重攻撃、
これは痛そうだ！」
「ＪＪ！罠設置！」
「了解！」
「続いて縦３！」
「オッケー！」
ようやく麻痺状態から解放されるクルペッコ。直後、落とし穴が口を開け、その身体を落とす。
再び頭に振り下ろされるハンマー。
カチャカチャとアイテムを入れ替える。
「Ｊ＆ａｍｐ；Ｃチームも負けじと落とし穴に！ハンマー、がっちりと打ち下ろされています！そして脱出・・・ここで閃光玉！再び落ちるクルペッコ！もがいています！おっと、そして二度目の麻痺！素晴らしい、本当に素晴らしいですＪ＆ａｍｐ；Ｃチーム！」
鳥は再びビリビリと電撃に打ちのめされながら、ザクザクと剣で斬られ続ける。頭には、執拗にハンマー。
もう少し、もう少しで終わる。このまま行けば、十分に勝てる。
まずい！
そう思った時には、既にクルペッコの火炎攻撃が、正面のＪＪを吹き飛ばしていた。炎に巻かれ、転げるＪＪ。
ペッコ特有の不意打ちだ。今のは仕方がない。
「消火の必要なし！攻撃パターン継続！」
「はい、教官！」
「おっと、ここでＪ＆ａｍｐ；Ｃチームが初の被弾。さすがはクルペッコ、トリックスターの本領発揮というところでしょうか。ｏｐｉｎｉｏｎチームは、二つ目の罠に落とし込む！再びうち下ろされ

る、ハンマーの嵐！すごい、すごい攻撃です！」
タイムロスは大きくないはず。だが、一瞬の焦りが生まれる。
「っ！」
隣の席から押し殺した声。ＪＪはくちばしの攻撃を受け、再び地面に這いつくばる。体力も半分ほどに低下した。
「教官！」
「大丈夫、まだやれる！残りのＨＰは少ないはず、このまま押せ！」
「はい！」
「Ｊ＆ａｍｐ；Ｃチーム、二度目の被弾です！これは痛いか？・・・・おおっと、ここでｏｐｉｎｉｏｎチームに痛恨のミス！」
観客がどよめく声が聞こえる。
「スタンプが重なったか、お互いを吹っ飛ばしてしまった！これは痛い！さあ、挽回できるか？」
アイテムは使い果たした、あとは攻撃あるのみ。自分のモニターに集中する。大丈夫、まだこっちの方が勝っているはず。回復さえされなければ・・・
瞬間、ペッコがくちばしを大きく空に掲げた。
・・・回復のモーション！これはまずい！ＨＰを回復されたら・・・
次の瞬間、ＪＪのハンマーが振り下ろされ、画面が切り替わった。
討伐完了、の画面と音楽。
「やった！やりましたＪ＆ａｍｐ；Ｃチーム！素晴らしい連？プレーの数々でした！お見事、まさにお見事！Ｊ＆ａｍｐ；Ｃチーム、ベスト８進出です！」
会場に響く歓声、そしてＭＣの声。
「やった！教官！やった！」
女神も、椅子から立ち上がってバンザイ、のポーズだ。
（やった・・・）
なんとなく声に出しそびれて、女神とハイタッチを交わす。どっと汗が吹き出して来た感触がして、いかに自分が緊張していたかを今更に知った。ある意味、剣道の試合よりも緊張していたかもしれな

い。
「教官！やっぱり教官はすごいです！やりました！」
「ＪＪ、よくやったよ。お見事」
「はい、お疲れ様でした！」
「これはちょっと、勝利者インタビューですよ。・・・おめでとうございます、Ｊ＆ａｍｐ；Ｃチームさん」
「はい、ありがとうございます！」
「女性のハンターは本予選、ＪＪさんが唯一ですよ。いやいや、素晴らしい。女性にもプレイしていただけて、しかもこんな素晴らしいタイム。開発者一同、御礼を申しあげたいくらいです」
「えへ、ありがとうございます！」
「お二人はカップルでの出場ですが、ハンター仲間でもあるんですか？」
「ええっと・・・」
「いえ、私の教官なんです。モンハンの中で知りあって、それで出場したんです」
いや、それちょっと誤解を招くような。
「なんと、モンハンで生まれたカップルということですか！素晴らしい！なんということだ！これは開発者チーフがもう、本社で泣いてますよ！」
「いや、実は同じ学校の・・・」
「Ｃａｎｏｎさん、素晴らしい片手剣使いの技でしたね！やっぱり普段から、お二人でプレイしているんですか？」
「ええ、まあ・・・」
「あのさ」
お兄さんは俺の顔をじっと見つめると、マイクを外して小声で言った。
「キャノンでいいのかな？」
「かのんで結構です」
「本当は？」

「かんのん」
「やっぱカメラ、好き？」
「わりと」
マイクに戻るお兄さん。
「それであの、見事な連？プレーが見られたわけですね！いやあ、見事でしたよね、開発のナカガワさん！」
遠くの方にいる、スタッフの人がうなずく。
「全くもって、息のあったプレーでした」
「会場の皆さんも、このどよめきです！」
うぉー！、という声が、観客から響く。
・・・半分以上は、女性ハンターさんの可愛さに向けられたものだろうな。
「さて、最後に一つ。Ｃａｎｏｎさん、あなたにとって、彼女はどういった存在ですか？」
どういった、存在。
女神の瞳を見つめる。
彼女は自分にとって、何だろう。
答えは、最初から決まっている。
「・・・彼女は僕の、勝利の女神です」

「んじゃ、帰りますか」
「はい、教官殿」
「・・・もうそろそろ、その言いかたやめていただけると嬉しいんですけど」
「だって、嬉しいんですもん？」
電車の窓から夕陽が見える。お台場を後にして、埼玉に向かう、右側の窓。
電車は比較的空いていて、４人席を２人で、向かい合って座ることができた。

「勝てなかったですけど」
「いいの。あんなに楽しい時間、生まれて初めてだったんだから」
「だったらいいんですが」
本予選、2回戦は「ロアルドロスとベリオロスの連続狩猟」だった。最善を尽くしたつもりだったが、相手のチームは一枚も二枚も上手で、驚くほどのタイムで勝ち上がって行った。文句の言えないほどの完敗だった。
「あの相手チームさん、凄かったね」
「ええ。優勝しましたからね」
「9分台出してたの、あのチームだけだったもんね。全国大会でも、優勝するかなあ」
「北海道大会で、同じく9分台出してたチームがありましたよ」
「やっぱり・・・世間は広いってことだよね」
ゆりかもめは静かな音を立てて、一本しかない線路の上を走る。
「また来年も出場して下さいって、言われちゃったね」
「それは多分、センパイに対する言葉ですね。今日一日で、何回可愛いとか綺麗とか言われました？」
「うーん、覚えてない・・・」
紙袋とぬいぐるみを見る。これもあれも、みんな可愛いとか綺麗とか何度も言われた。
「でもね、でも、嬉しかったの」
「そりゃ、褒められれば嬉しいに決まってます。俺はあり得ませんけど」
「かのんくんも、十分にカッコいいよ。・・・じゃなくて、『可愛い』じゃないの、嬉しかったのは。・・・もっと嬉しいこと」
「え？・・・ああ、本予選まで行ったし、1回戦は勝ちましたしね。あれも、今考えればよく勝てたもんだと」
「だから、違う。もっともーっと、嬉しいこと」
「・・・ぬいぐるみ？」
「かのじょはー、ぼくのー、しょーりのー、めー、がー」

「わーっ！やめっ！ごめんなさいっ！」
向かいの席に座る、女神の肩を両手でぎゅっとつかむ。
「もう言いませんから！自分でもなに喋ったのかわからなかったんです！」
「すごい歓声だったよね。あとでスタッフの方々も、あの日一番の大歓声でしたねーって言ってくれたし」
「・・・許してくれませんか、もう」
「あとあと、かのんくんってかなりダイタン発言繰り返してたよね。また来年も来ましょうセンパイ！とか、今日から毎日特訓だ！とか」
「・・・そういうふうに取れるもんですか」
「それに、さ、これ」
ぼふっ、とぬいぐるみを抱える。
「５０年後にアイに行きますよ？とか。もう、女泣かせっていうか、普通だったら女の子、泣いちゃうよ？」
「・・・もうちょっと、話し方を勉強することにします」
「いいの。わざと言ってるんじゃないところが、女の子にはぐっと来るんだから。キザったらしく言われたら、すぐ幻滅しちゃう」
「さらに難しいですね」
「そのままでいいってことだよ、かのんくんは。いつかゼッタイ、とっても素敵な彼女ができるよ。私が保障する。うん、間違いない」
赤い夕陽が照らす、夢のように美しい顔。でも、この顔がすぐ近くにあるのか、とても遠い場所にあるのか、それすら今の俺は分からない。世界で誰よりも近い場所にいるとも思えるし、絶対に拒絶される、という確信もある。何せ、ゲームの中で知りあってまだ一ヶ月とちょっと、センパイだと分かったのは１０数日前。リアルで会話したのは、わずか４日前だ。
その４日間で、それまでの人生を一変してしまうくらいのいろんなことがあったけど、それでもまだ４日間。それが、姫神万理沙と今宮直樹が過ごした時間。実質３日。
彼女は元アイドルで、ファンも未だにたくさんいて、学校にも大量

のファンがいて、ファンクラブがあって、めっちゃめちゃカッコいい先輩や、野球部のエースとか、ぶっちぎりに釣り合っちゃう人が彼女にしたい女性ナンバーワンなわけで、とてもとても、口下手で根暗な一年生剣道部員が望むような存在ではない。彼女にも辛い過去があって、それがトラウマとなっていまでも恋に踏み出せないが、いつかは全てを受け入れてくれる彼氏だって現れる。いや、処女じゃなくても、たとえつらい過去が、病気があって、彼女がそれを負債に思っていても、別に今の彼女が病気であるわけではない。子供が産まれにくいかも、と言っていたが、それは小学生の頃に言われた話で、高校性になった今、ちゃんと検査を受ければ『何ともないよ』と笑われるかもしれない。

彼女の持つ魅力、整った顔やすらりとした姿だけではなく、誰にも気持ちのいい態度、思いやりを忘れない気遣い、鈴の音を転がすような話し声、責任感のある行動、いざという時に思い切りよく飛び込んで行く度胸。どれを取っても素晴らしいの一言だ。その魅力をして、過去のことなどどうでもいいさ、と笑って許せることなどたやすいものだと思える。

彼女は誰も受け入れてくれない、と頑なに思っているが、世の中にたくさんいる、心の広い人たちの存在を知れば、きっと考え方も変わる。世の中には、きっと彼女よりももっと酷い目にあった人たちもたくさんいて、それでもみんなそれを許し合い、胸の内に含み合い、昇華して生きている。彼女だってそうに違いない。そして、その時こそ、全ての憂いを無くしたその瞳はさらに遠くを、その翼はさらに高みを飛ぶことができるだろう。たかがゲームの中で知り合った、ちょっと女性に縁のない野郎が話を聞いてあげて、浮かれているだけだ。

「どうしたのかのんくん？急に黙っちゃって」

いきなり焦点が合う。どうやら女神の顔を見つめたまま、ぼーっとしていたらしい。

「次の駅で乗り換えだね。何時頃、大宮に着くかなあ」

「えーと」
携帯を取り出して操作する。
「１９：３４ですね」
「ちょっと遅くなっちゃうね。お姉ちゃんにメールしとく」
携帯を取り出し、ささっと操作してすぐに仕舞う。電車内でのマナーだ。
「でもまだ、あと1時間は一緒にいられるね？」
「え・・・はい。ちゃんと送って行きますから」
「ん・・・ありがと。かのんくんなら、怖い人がいても安心だね」
「いえいえ、案外、すぐ逃げちゃうかもしれません」
「あはは。武器は片手か大剣か？ちゃんと選ばせてあげるから！」
「部活停止になりそうですそれ」
「正当防衛だよ。黙っておけばいいのいいの」
「うちの生徒会の副会長さんは厳しい方だそうで、全て白状させられてしまうって噂なんです」
「へーえ！怖い人がいるもんだね！どんなオニの顔なんだろうねー！」
「それが、めっちゃめちゃ美人って評判ですよ」
「あはははは。いっぺん見てみたいな！本当に美人かどうか！このあたしに勝てるかな？」
「明日の朝、鏡に映っているかもしれませんよ？」
「そっか！じゃあ、明日の朝を楽しみにしてる！」
電車がホームに入り、人々が立ち上がる。釣られて、俺たちも立ち上がった。

人通りの少なくなった団地の道を、自転車を押して歩く。もう外は暗い。
駅に止めてあったので、チャリで送りますよ、と言ったのだが、女神はゆっくり歩きたいから、とすまなさそうに言った。別に異存はない。少しでも一緒にいられる方が、夢の時間が長く続くから。

そう、これはきっと夢のような時間。ゲームを通じてイベントに行くだけの、わずか数日にかけられた魔法。今夜２４時で魔法は溶けてしまい、現実に戻る。俺が女神に呼び出される用事はなくなってしまい、学校では退屈な授業を受けて、タカシと、美沙としゃべってだべって、部活に行って誰もいない家に帰る。その日常が戻ってくるだけ。至福の時間をくれた女神は、再び天国へ戻って行く。

「楽しかった、ねー」

左側を歩く女神は、何度目かとなるそのセリフを言った。

「一生忘れない日になりましたよ」

「あはは。かのんくんらしい」

「本当にですから」

「うん。・・・ありがとう」

ゆっくりとした足取りも、やがて終わりを迎える。彼女の家、ちょっと他の家より敷地の大きな二世帯住宅が、夜の闇の中に姿を現した。

「かのんくん、ううん、今宮くん、言葉ではもう言い表せないけれど、今日は私にとってとても大切な、素敵な一日だった。こんな私を、受け入れてくれてありがとう。たくさん迷っちゃったけど、間違ってなかった」

「自分も、です。初デート、ですから」

「あはは。実は私もそう。お父さん以外は初めてのデート。初めてで気が利かなかったかもしれないけれど」

「こちらこそ」

「また・・・」

その先は、彼女には言えなかった。自分にも。それが姫神万理沙という少女の限界、今宮直樹という少年の限界。

「ええ。また」

「メールするよ」

「待ってます」

「かのんくん・・・名残惜しいよ」

「自分も、です。でも、ご家族が心配されますし」
「かのんくんも、お母さん待ってるね、きっと」
「明日は大阪で仕事なんで、今日からもう行ってます」
「そっか。・・・じゃあね、かのんくん。気をつけてね」
「はい。ありがとうございます。お休みなさい」
「お休みなさい・・・」

門を少しだけ開け、中に消えて行った女神。俺はどう扱えば良かったのか、なにがベストエンドで、今の現実がナチュラルエンドなのか、バッドエンドなのか、それともこれがベストだったのか、分からなかった。いつかは分かる時が来るだろうか。
夜の道を自転車で疾走しながら、様々な考えが頭をよぎった。あのまま抱きしめて思いを打ち明ければ、もしかしたら可能性があったんじゃないだろうか。頑固な彼女のことだ、最初は頑なに拒絶するだろうけど、いつか心を開いてくれたかもしれない。それはもしかしたら、この魔法の時間の中だけで有効な魔法だったのかもしれない。女神はなんと言っていたか？いいえ、私の片想いなんです、と。あのセリフは店のおじさんに対する、単なるジョークだったのだろうか。もしかしたら、彼女にできる最後の告白だったんじゃないだろうか。俺はそれをぼーっと聞いていただけだった。聞き流していた。それを見て、女神はどう思っただろう。精一杯の告白を受け流された、と傷ついただろうか。
いや待て、と電車の中の思考が蘇る。お前が釣り合う女性だと、本気で思うのか？気安くつけこんで、心の端にうまく触れただけだ。女性はある日突然、誰かに心の中を吐き出したくなるのかもしれない。それが初めての行為なら、それを告げた相手を信頼できる人、などと思い込んでしまうだろう。それは言わば、ハシカのようなものだ。彼女はこの数日、ハシカにかかっただけだ。すぐに治る。治ったら現実に戻る。つまらない男を相手にしてしまった事を、後悔

されるのは嫌だ。
だが、とまた心の中の誰かが反論する。女神は１６年間生きてきて、初めて家族以外の男性に温めてもらった。心が溶かされるよう、と言った。溶かしてやったのは誰だ？カッコいい先輩か？エースピッチャーか？違う、俺だ。俺だけができたことだ。彼女は一度、俺の汚い心に触れた。ゲームしよう、そう無邪気に笑った彼女の背後で、俺は不覚にも女神に突起物を押し付けてしまっていた。彼女にもそれが分かっていた。それでも、彼女は再び二人きりになることを決意した。出会ってまだ2日しかたっていない男の子の部屋に、進んで入った。温めて欲しい、ぎゅっとして欲しい、そう言った。だが、本当はそれだけだったのか？普通の思考を持っていれば、彼氏でもないオトコの部屋に入るということが、どういう結果になるかは分かっていたはずだ。信頼できるから、そんな台詞は、怒涛のごとく流れる男の性欲の前には無意味だ。抱かれてもいい、そう確かに彼女は言った。自分の汚れた部分を話して、それでも全てを強引に奪ってくれることを、上書きしてくれることを、その後はどうなるかも分からないような男の部屋に。いや、それはさすがに考えすぎかもしれない。が、あの時、彼女は何度も俺の言う言葉を遮った。それをさらに遮って、抱き寄せて、芯から温めてもらうことを、望んでいたんじゃないか。
バカを言うな（笑）。また誰かが反論する。お前に抱かれたかったって？こんな薄汚いお前に？ふざけんな反吐が出るぜ。お前は一体、彼女を頭の中で何度犯した？今の彼女を、そしてジュニアアイドルの頃の彼女を。お前の机の奥にある写真集はなんだ？１０歳前後の、まだ性的未成熟な頃の彼女を何度オカズにした？お前はロリコンで、ペドフィリアで、彼女の小さい頃の赤い水玉の水着を、その奥にある隠された身体を見たいだけの変態だ。腐れ外道だ。それだけじゃない。てめえ、ゲームに熱中している彼女の事を欲情に染まった目で眺めていただろ。ああ。目で犯していた。視姦していた。いつ襲うか、どうやってシャツを脱がせて、彼女の背後に回って、腐れた

分身を
「やめろ！」
ギュッとブレーキを絞った。キキキッ、と自転車が止まる。
「やめてくれ・・・」
これ以上、女神を穢すのは。
これは一体何だ。なにが起こっている。
俺は多重人格者で、人格破綻者なのか？
倒錯した性的犯罪者、もしくはその予備軍なのか？
女神に対する想いは、敬愛の念ではないのか？単なる性欲か？もしくは有名な女性を彼女にしたい、みんなに羨ましがられるような思いをしたい、それが本当の気持ちなのか？
抱きしめた温かさは、単なる肉欲のすり替えか？彼女が許してくれたから、大っぴらに抱きしめたかっただけか？
彼女の血を吐くような告白は、どう思った？むしろ都合がいいと思ったか？誰も知らない彼女の過去を知れば、彼女は気を許してくれる、つけ込めるとでも？
いや。
いいや、違う。
そういう想いは、ないわけじゃない。
だが、それが本質じゃない。絶対に。
女神に、会いたかった。
ただ無性に会いたい。会って、今の気持ちを伝えたい。心の底から、そう思った。
暗闇の中、誰も待っていない場所に向かって、自転車を返す。

「待ってたよ」
「・・・どうして、戻って来ると思ったんです？」
誰もいないと思っていた、家の門のすぐ外に、女神は立っていた。
誰もいない闇を見据えながら。

「戻って来なかったら、私が今から行っちゃうところだったから。かのんくんちに」
「あの、時間は」
「一旦帰ってから、また出てきたの。みんな部屋にいると思ってるよ」
「・・・」
「ちょっと話がしたいよ。かのんくんも、でしょ？すぐ近くに公園、あるから。そこいこ」

公園についた。
隣り合わせに、ブランコに座る。ブランコなんていつ以来だろう。
小学生、それも低学年だろうか。
だが、言葉が出ない。
会いたい。会って、思いを伝えたい。そう思って引き返してきたのに、せっかく会えたのに、言葉が出ない。
言葉は、難しい。
生まれて初めて、そう思った。
順序立てて言わなければ、全てを気持ちは伝わらない。
でも、その順序が、整頓が難しい。
口を開けば、どちらの自分が出て来るか分からない。どの気持ちが先に、吐き出されてくるのか分からない。
言葉はとても困難だ、そんな歌詞が昔あったようなきがした。
「かのんくん、私ね、今から」
「ダメです」
「え？」
「僕が先、です。絶対に」
「・・・うん」
「言いたい言葉は山ほどあります。そこには、プラスの感情も、マイナスの感情も、あります」
「うん」

「女神には知って欲しくない、気持ちもあります。言いたい気持ちも。女神のことも、前から学校で知っていたことも、モンハンの中で知ったことも、つい最近知ったことも、今日初めて知ったことも」
「うん・・・うん」
「金曜日に知ったことも、あります。帰りの電車の中で気づいたこと、チャリ漕いでて気づいたことも。たぶん、すごく上手に言えば、頭の中を整理して言えば、言葉の上手な人が言えば、後から思い出して、
ゆっくり言えば、もしかしたら今から僕が言うことの結末が、変わるかもしれない」
「うん」
「でも、だめなんです。全部いっぺんに、全部言いたい。いい所だけ取り出せないんです。後で後悔するとしても、もう一生後悔しながら生きるとしても、全部を一度に伝えたいんです、センパイに」
「うん」
もう、途中から誰が何を言っているのか、すでに分からなくなりつつある。同じことを何度も言っている気がする。才女を前に、なんて失礼なヤツだ。
でも、もう止まらない。止められない。
「俺は、いろんなことを考えました。でも、結局全て、自分を守りたかっただけでした。センパイに拒絶されたらとか、他に人にどう思われるかとか、自分が傷つきたくない、ちっぽけな自分を守りたい、今まで通りに過ごしたい。それでいい。そんな風に」
「私だって、そうだよ」
「だから、言います。僕は、」
ブランコから立ち上がった。せめて、この想いだけは、真正面から伝えたい。
「あなたを、心から愛しています。好きなんじゃない、愛しています。姫神センパイ」

人気の無い、闇の中の公園。
道沿いにある街灯は、女神の表情を教えてはくれなかった。
静かな住宅街はしん、と静まり返っている。時折聞こえるのは、遠くの道を通って行く車の音。
一言に、全てを込めたつもりだった。
これ以上の余分な言葉は、付け足せばあとから後から湧き出して来る。でも、それはそのコトノハの表面一つ一つでしかない。見上げるような大樹に、葉っぱ一つ一つの説明は要らない。飾り立てた甘い言葉をせがむような、そんな女性ではない。
目の前に座るのは、そんな女性。だから、その言葉になった。
沈黙は、彼女の思考の混乱を意味しているのかもしれない。けれど、もう返事がなくても分かっていた。俺には分かっていた。彼女は、俺の事を待っていたんだから。気持ちは、通じている。間違いなく。あとは、その心を彼女が受けれるか、それだけ。
「・・・わたし、いろんな事を考えちゃった。昨日から。いいこと、悪いこと、たくさん」
「・・・」
「その中に、かのんくんが私の事を好きになってくれる、告白してくれる、ってのもあったの」
「ええ」
「それに対する返事、言い訳、それもたくさんあったはず。それも、その場で直接言っちゃうとか、あとで返事をします、とか、お手紙を書くとか、メール送るとか」
「・・・」
「ねえ、かのんくん。いま、完全に思考が繋がってるよね」
「ええ。そう思います」
「言葉って」
「伝えにくいですね」
「返事は、聞かなくても」

「分かってます」
「あたしは、受け入れるのかしら」
「間違いなく」
「どうしてそう思うの？」
「あそこで会えたから。２４時の魔法が解ける前に」
ふー、という、深いため息が聞こえた。
「やっぱり・・・こうなっちゃうんだね。最終的に」
「そうですね。最初から分かってた気がします」
「全部、思考が一致しちゃってるね、今」
「今だけかもしれません」
「いっぱい、言いたいことあるね」
「一晩では終わりませんね」
「何か、一つの事を互いにあげて、さ」
「延々議論して、自分なりの説明をして、言い分を聞きます」
「そこでまた反論して、笑って、泣いて、愛しあって」
「でも、やっぱり聞いてしまうと傷つきます」
「で、あっため合う。これが愛なのか、欲望なのかは分からないけれど」
「きっと、全部混ざってこうなってるんです。これはない、あれはない、なんてことはありませんし、言えません」
ゆっくりと、彼女はブランコから立ち上がった。おずおずと近づいて来て、額を俺の胸に押し付け、腕を背中に回す。
彼女の背はあまり高くなくて、口元のあたりがちょうど額。
ふはー、とまたため息。
「もうだめ、かのんくん、完全に負け」
「二人とも勝ったんです」
「これ以上、言い訳しないことにする。私、こんな女だよーとか、いっぱい否定したりとか」
「ええ、分かってます」
「でも、あとでぐちぐち言うんだ、他の時にきっと」

「それも分かってます」
「一緒になろっか」
「もう、なってますよ」
「いろんなこと、いっぱいよろしく」
「はい。こちらこそ」
俺も彼女の背中に腕を回した。ぎゅうっ、と抱きしめる。そう、この温もり。何にも換えがたい、この感触。
キスしたい。
そういう気持ちが流れ込んで来た。
俺が思っていることは、きっと彼女も思っている。
抱擁を解いて、顔を上げた。
少し潤んだような瞳が、下から見上げてくる。
そっと、唇を引き寄せた。

「へぇっく、しょいっっっっ！」
「うわあああっ！」「きゃあああっ！」
俺とセンパイは、音速で身体を引き離した。
「あ、あー、ごめん、万理沙。あと直樹くん」
暗闇の中で、誰かが立ち上がった。先程告白した愛しい女性に、良く似た顔立ちの女性。
「お！お、お、おお、おおおお」
「万理沙、まりさ、ごめん、落ち着いて」
「おおお、お姉ちゃん！一体、いつから・・・」
「あーごめん、ホントに。もう最初っから全部。こっそり家に戻るつもりだったんだけど」
「最初っ、から・・・」
俯く女神。その小さな身体から、世界を滅ぼさんとする魔王の様な瘴気立ち昇っている。うむ、見える。暗闇の中でも。
「だ、だ、だ・・・」
「ま、まりさ、あのねこれはその」

「大っ嫌い！もうお姉ちゃんなんて大っ嫌い！」
猛ダッシュで、公園を飛び出して行く。
・・・あーあ。
「いや、もう何度も言うけどごめんね、直樹くん。超いい場面だったのに」
「わざと、ってことはありませんか？妹想いのお姉さん」
「ななみ、でいいよ。ご想像にお任せするわ。・・・とか言いたいけど、本当に今のは不可抗力。あんなの邪魔するほど、無粋じゃないわよ」
「いつぞやの家の時は」
「あのままで、理性を保つ自信があったの？私が言うのもなんだけど、あの子、たぶん日本一可愛いわよ」
「・・・感謝しています」
あそこでどうにかなっていたら、今と同じ結末ではなかっただろう。
「こちらこそ、と言いたいわね。ごめん、もう全部知ってるし、聞いちゃったから言うけど、あの子のこと、全部聞いたんだわよね？」
「ええ」
「ゲスな男なら、それをネタに、とか考えても良かったはずだからね」
それは、一瞬考えなかったわけではない。学校の生徒・教員に全てバラす、という脅迫。
だが、その選択肢はなかったし、なくなった。
「心までもらっちゃうことにしたんです」
「・・・あなた、それアニメとかの見過ぎ？高校生の台詞じゃないわよ」
はて。そんなアニメがあったかなあ。
首を捻る。
「・・・まあ、ナチュラルで言ってるなら、またきっと近いうちに苦労するわね、あなたも、あの子も」
「どう言う意味ですか？」

「もうちょっと経験を積めばわかるわよ」
「・・・精進します」
「さて。・・・あたしは今から、どうやったらあの子が口をきいてくれるか、朝学校にちゃんと行けるか、言い訳をたっぷり考える事にするわ。直樹くん、朝大丈夫？」
時計を見る。午前１時３５分。
「・・・やばいっす」
「朝、あの子を叩き起こしたら、一番でモーニングコールさせるわ。あの子の声で起こして欲しいでしょ？」
「そりゃあもう」
「じゃ、それでチャラ、ね」
いささか強引な条件だが。
「異存はありません」
「それじゃ、気をつけて帰るのよ。未来の弟さん」

二学期になった。
一学期の終わり、猛烈な嵐が吹き荒れた学期末は終わり、夏休みになった。モンハンフェスタにはやっぱり同じ学校の生徒が来ていて、べったりいちゃいちゃしているところを見られ、写メールで一斉に学校中にばら撒かれ、月曜日に眠気眼を擦りつつたどり着いた教室では異端諮問官のようなタカシが待ち構えていたりして、でも噂では二年生はもっとすごい事になっていて、月曜のお昼には俺と女神が揃って生徒指導室に呼び出されるハメになったけれど、いつしか嵐は止んでいった。
同じ一年生の妬みはすごいものだろうと構えていたが、最初の頃にちょっと話がこじれただけで、その後はむしろ、応援しよう的な雰囲気になったり、上級生から今宮守ろうぜ、みたいな妙な雰囲気になっていった。タカシや美沙の影響かどうかは知らない。実質的な

嫌がらせは、机にウンコが載せられていたのが一度、チャリが両輪パンクさせられていたのが二度ほど。大したことではない。
女性サイドの影響はほとんどなく、最初の頃に一度、女神の友人という女性3人がやってきて、いろいろと（主に女性関係の）質問をしていったが、普通に話しているうちに打ち解けて帰っていった。
まあ、女神は女性にも人気があったし、そもそも妬んでも得になったりしない性格だし。
で、夏休み。

「で、お母様、今度はホイップを混ぜます。最初は大きめのボウルに入れて、ゆっくりと丁寧に・・・」
うちの母親からすれば、モテナイ息子に可愛い彼女が出来たわけで、念願の「娘にお菓子作りを教える」を実行したわけなのだが（もちろん結婚したわけじゃないから、娘でもなんでもないのだが）、むしろなんでもできてしまう女神に逆に教えられる始末。それでも、なんだかんだと楽しく作っている。やはり推理小説好きは話題が合うのか、家に来るたびに知らない外国人の名前を話し合っている。
さっぱり分からないが、気の合うのはいいことだ。今度、一緒に泊まりがけで遠くのアウトレットモールに服を買いに行く計画まで立てているらしい。おいおい、息子はどうするんだ。餓死するぞ。
彼女の家にも何度かお邪魔することになり、夏休みの間に都合5回ほど、お世話になった。いろいろと想像していたが、予想以上にご両親は穏やかでほわわんとしていて、娘をよろしくお願いします、などと逆に頭を下げられてしまった。このお母さんが娘にそんなことを強要したり、お父さんが激怒したなどとは到底想像もできない。だが、眼鏡の奥に湛えられた光は深い力を宿していて、いざ、ということを感じさせるおとうさんだった。忙しい建設会社の支店全てを任されている立場とのこと。
5回もお邪魔したわけは、このお父さんの趣味が将棋だからだ。どうも、娘二人や妻は一切相手にしてくれないらしく、コンピュータ

将棋はやりたくない、と普段は社員相手にさしているとのこと。だが、仕事中に社員をさぼらせるわけにもいかず、休日はあまり好きではないゴルフばかりで対局に飢えていたらしい。もっとも、てんで弱かったので、社員もわざと負けたりしていたのだろう。
お姉さん、正式名称姫神奈々美さんは現在大学生。将来はまだ未定らしい。正直なところ、万理沙さんよりも奈々美さんの方が美人に見えることがある。ならどうして妹だけが芸能界に入ったのか？それは今でも聞いたことがない。おいおい、話してくれることもあるだろう。
タカシと美沙は今まで通り。つき合っているということは内緒というか、誰にも言わずにいるつもりらしい。密かに夏休み、女神を入れて４人でダブルデートしたりもした。主にタカシの希望で。もちろん、途中で互いの相手が一時的に入れ替わったのもタカシの策略だ。３０分とはいえ、女神を独り占めできたタカシは、顔全体の筋肉が弛緩したような顔で戻ってきた。女神も楽しんでいたようなので、まあいいこととする。美沙も大して怒っていなかったようだし。
剣道部は相変わらずだ。一学期の終わり頃はやや乱暴な仕打ちも受けたが、夏休みに入ると秋の新人戦もあるため、私怨ばかりはしていられなくなった。だが、あのキャプテンでさえも「今宮、本当のところ、おまえが羨ましいよ」と言っていた始末。女神は偉大である。

「まだ、ちょっと暑いね」
「ええ。台風が今年は少ないみたいで」
「夏は苦手だったけど、今年の夏はとっても楽しかった。いっぱい遊びに行けたし」
「宿題があんなに早く終わったの、初めてでしたよ」
「あはは。ちょっと教えすぎたかしら？」
「来年も、この調子でお願いします」
「あーっ、かのんくん、ホントは自分でやらなきゃだめなんだよ？

実力テストとかに響いちゃうよ？」
帰り道、いつものようにチャリを押して歩く。
彼女の歩調はゆっくりで、なぜか少し前をいつも歩く。だから、見ているのはいつも背中だ。
彼女の存在は眩しくて、まだ少し気後れしてしまう。
いつか、並んで歩けるようになるだろうか。
巨大なモンスターに立ち向かった、分身の二人のように。
そう、二人ならいつだって、立ち向かっていける。どんな相手にでも。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3375y/

ふたりでもんはん

2011年11月8日03時12分発行